

基本計画書

基本計画									
事項		記入欄						備考	
計画の区分		学部の学科の設置							
フリガナ 設置者		ガクウアカデミー ナゴヤガクイン大学 学校法人 名古屋学院大学							
フリガナ 大学の名称		ナゴヤガクイン大学 (Nagoya Gakuin University)							
大学本部の位置		愛知県名古屋市熱田区熱田西町1番25号							
大学の目的		本大学は、学校教育法、および教育基本法の規定するところに従い、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、キリスト教主義に基づいて人格を陶冶することを目的とする。							
新設学部等の目的		こどもスポーツ健康学科は、子どもの成長やスポーツに関する高度な専門知識を基に、心身ともに健やかな幼児期および児童期を保証し、さらにスポーツ習慣の形成による生涯をとおして健康を考え、指導・教育ができ、健やかな社会づくりに貢献できる人材を育成することを目的とする。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	スポーツ健康学部 [Faculty of Health and Sports]	年	人	年次人 年次	人		年 月 第 年次	愛知県瀬戸市上品野町1350番地	
	こどもスポーツ教育学科 [Department of Education and Sports for Children]	4	50	—	200	学士(こどもスポーツ教育)	平成27年4月 第1年次		
	計		50	—	200				
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）		学部学科設置 現代社会学部 現代社会学科 (150) (平成26年4月届出済み) 国際文化学部 国際文化学科 (100) (平成26年4月届出済み) 国際文化学部 国際協力学科 (50) (平成26年4月届出済み) 定員変更 経済学部 経済学科 [定員減] (△50) (平成27年4月) [3年次編入学定員減] (△10) (平成27年4月) 商学部 商学科 [3年次編入学定員減] (△5) (平成27年4月) 学生募集停止 経済学部 総合政策学科 (廃止) (△150) 外国語学部 中国コミュニケーション学科 (廃止) (△50) 外国語学部 国際文化協力学科 (廃止) (△50) ※平成27年4月学生募集停止							
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
	スポーツ健康学部 こどもスポーツ教育学科	125科目	11科目	38科目	174科目	136単位			
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等
				教授	准教授	講師	助教	計	
	新設分	スポーツ健康学部	人	人	人	人	人	人	人
		こどもスポーツ教育学科	5 (5)	5 (5)	4 (4)	1 (1)	15 (15)	0 (0)	30 (11)
		計	5 (5)	5 (5)	4 (4)	1 (1)	15 (15)	0 (0)	29 (11)
	既設分	経済学部 経済学科	12 (13)	11 (11)	10 (10)	0 (0)	33 (34)	0 (0)	37 (37)
現代社会学部 現代社会学科		9 (9)	4 (4)	4 (4)	0 (0)	17 (17)	0 (0)	35 (15)	

教 員 組 織 の 概 要	既 設 分	商学部 商学科		11 (11)	7 (7)	5 (5)	0 (0)	23 (23)	0 (0)	25 (25)	
		商学部 経営情報学科		6 (6)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	21 (21)	
		法学部 法学科		11 (11)	1 (1)	2 (3)	2 (2)	16 (17)	0 (0)	36 (35)	
		外国語学部 英米語学科		9 (9)	2 (2)	3 (3)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	45 (45)	
		国際文化学部 国際文化学科		8 (8)	2 (2)	4 (3)	0 (0)	14 (13)	0 (0)	40 (30)	
		国際協力学科		4 (4)	1 (1)	4 (4)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	40 (30)	
		スポーツ健康学部 スポーツ健康学科		6 (6)	3 (3)	3 (3)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	14 (14)	
		リハビリテーション学部 理学療法学科		8 (8)	3 (3)	3 (3)	1 (1)	15 (15)	2 (2)	22 (22)	
		計		84 (85)	37 (37)	41 (41)	3 (3)	165 (166)	2 (2)	169 (162)	
		合 計		89 (90)	42 (42)	45 (45)	4 (4)	180 (181)	2 (2)	182 (162)	
教 員 以 外 の 職 員 の 概 要	職 種		専 任		兼 任		計				
	事 務 職 員		83 (83)		32 (32)		115 (115)				
	技 術 職 員		3 (3)		0 (0)		3 (3)				
	図 書 館 専 門 職 員		4 (4)		7 (7)		11 (11)				
	そ の 他 の 職 員		0 (0)		0 (0)		0 (0)				
	計		90 (90)		39 (39)		129 (129)				
校 地 等	区 分	専 用	共 用		共用する他の 学校等の専用		計				
	校 舎 敷 地	225,418.99 m ²	0 m ²		0 m ²		225,418.99 m ²				
	運 動 場 用 地	83,493.78 m ²	0 m ²		0 m ²		83,493.78 m ²				
	小 計	308,912.77 m ²	0 m ²		0 m ²		308,912.77 m ²				
	そ の 他	64,081.16 m ²	0 m ²		0 m ²		64,081.16 m ²				
	合 計	372,993.93 m ²	0 m ²		0 m ²		372,993.93 m ²				
校 舎		専 用	共 用		共用する他の 学校等の専用		計				
		74,102.73 m ² (74,102.73 m ²)	0 m ² (0 m ²)		0 m ² (0 m ²)		74,102.73 m ² (74,102.73 m ²)				
教室等	講義室	演習室	実験実習室		情報処理学習施設		語学学習施設			大学全体	
	95 室	82 室	27 室		6 室 (補助職員 0 人)		8 室 (補助職員 0 人)				
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称				室 数				申請学科全体	
		スポーツ健康学部 こどもスポーツ教育学科				15 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種		電子ジャーナル 〔うち外国書〕 点	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点		申請学科全体	
	スポーツ健康学部 こどもスポーツ教育学科	105,953[23,707] (100,433[23,443])	1,229[422] (1,229[422])		409[284] (409[284])	1,903 (1,631)	2,875 (2875)	0 (0)			
	計	105,953[23,707] (100,433[23,443])	1,229[422] (1,229[422])		409[284] (409[284])	1,903 (1,631)	2,875 (2875)	0 (0)			
図 書 館		面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数				大学全体	
		5,907.13 m ²		778		550,000					
体 育 館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要							
		6,711.52 m ²		野球場1面、屋内プール1面、テニスコート17面、ゴルフ練習場1面他							

経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次	申請学科全体図書費にはデータベース等の整備費(運用コスト)を含む。 共同研究費については大学全体の中で審議・決定する為に記載額は大学全体。	
		教員 1 人当り研究費等		680 千円	680 千円	680 千円	680 千円	— 千円	— 千円		
		共 同 研 究 費 等		3,697 千円	3,697 千円	3,697 千円	3,697 千円	— 千円	— 千円		
		図 書 購 入 費	7,998 千円	2,586 千円	2,586 千円	2,586 千円	— 千円	— 千円			
		設 備 購 入 費	207,683 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円	— 千円			
	学生 1 人当り納付金		第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次	第 6 年次			
			1,370 千円	1,090 千円	1,090 千円	1,090 千円	— 千円	— 千円			
学生納付金以外の維持方法の概要				補助金収入、手数料収入、資産運用収入、雑収入等							
既設大学等の状況	大 学 の 名 称		名古屋学院大学								平成24年度より政策学科を名称変更

既設大学等の状況	大 学 の 名 称	名古屋学院大学大学院							
	経済経営研究科								
	経済学専攻修士課程	2	7	—	14	修士(経済学)	1.14	平成9年度	愛知県名古屋市熱田区大宝三丁目1番17号
	経営政策専攻博士前期課程	2	20	—	40	修士(経営学)	1.17	平成9年度	同 上
	経営政策専攻博士後期課程	3	5	—	15	博士(経営学)	0.80	平成11年度	同 上
	外国語学研究科								
	英語学専攻修士課程	2	7	—	14	修士(英語学)	0.35	平成9年度	同 上
	国際文化協力専攻修士課程	2	5	—	10	修士(国際文化協力)	0.40	平成21年度	同 上
	英語学専攻博士前期課程(通信教育課程)	2	20	—	40	修士(英語学)	0.67	平成13年度	同 上
	英語学専攻博士後期課程(通信教育課程)	3	3	—	9	博士(英語学)	0.33	平成20年度	同 上
附属施設の概要		名 称：名古屋学院大学健康センター 目 的：学生（リハビリテーション学部）の臨床実習及び教員の臨床研究に資する。 所在地：愛知県瀬戸市上品野町1350番87 設置年月：平成23年10月 規模等：建物（鉄筋RC造平家建） 218.7㎡							

別記様式第2号(その2の1)

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(スポーツ健康学部こどもスポーツ教育学科)																	
科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考		
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	キ リ ス ト 教	キリスト教概説	1前	2			○								兼1	オムニハス ※実習 集中	
		キリスト教学	1後	2			○								兼1		
		小計(2科目)	—	4	0	0	—			0	0	0	0	0	兼1		
	自 己 理 解 と 自 己 開 発	基礎セミナー	1前	2				○		5	5	4	1		兼1		
		基礎セミナーⅡ	1後		2			○		5	5	4	1		兼1		
		キャリアデザイン1a	1前	2			○								兼1		
		キャリアデザイン1b	1後		2		○								兼1		
		キャリアデザイン2a	2前		2		○								兼1		
		キャリアデザイン2b	2後		2		○								兼1		
		キャリアデザイン3a	3前		2		○								兼1		
		キャリアデザイン3b	3後		2		○								兼1		
		ボランティア学	1・2・3・4前		2		○								兼3		
		ボランティア演習	1・2・3・4前・後		2			○							兼1		
		インターンシップ	1・2・3・4前・後		2				○						兼1		
	小計(11科目)	—	4	18	0	—			5	5	4	1	0	兼7			
	社 会 的 教 養	人 間 理 解	哲学	1・2・3・4前		2		○									兼1
			哲学史	1・2・3・4後		2		○									兼1
			心身関係論	1・2・3・4前		2		○									兼1
			心理学概論	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			キリスト教人間学	2・3・4前		2		○									兼1
			死生学	1・2・3・4前		2		○									兼1
			臨床心理学	1・2・3・4前		2		○									兼1
			倫理学	1・2・3・4後		2		○									兼1
		社 会 理 解	社会学入門	1・2・3・4前		2		○									兼1
			宗教社会学	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			日本国憲法	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			現代社会と法律	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			暮らしと法律	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			現代社会と経済	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			会計入門	1・2・3・4後		2		○									兼1
			現代社会と福祉	1・2・3・4後		2		○									兼1
		自 然 理 解	数学	1・2・3・4前		2		○									兼1
			統計学	1・2・3・4後		2		○									兼1
			化学	1・2・3・4前		2		○									兼1
			生物学	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			地球科学概論	1・2・3・4前		2		○									兼1
			地球物理学概論	1・2・3・4後		2		○									兼1
			人類学	1・2・3・4前		2		○									兼1
			物理学	1・2・3・4後		2		○									兼1
			生命倫理	1・2・3・4後		2		○									兼1
		歴 史 文 化 理 解	日本史	1・2・3・4前		2		○									兼1
			日本文化史	1・2・3・4後		2		○									兼1
			文化人類学入門	1・2・3・4後		2		○									兼1
			陶芸論	1・2・3・4前		2		○									兼1
			陶芸演習	1・2・3・4後		2		○									兼1
		環 境 理 解	環境科学	1・2・3・4後		2		○									兼1
			生態学	1・2・3・4前・後		2		○									兼1
			地域生態論	1・2・3・4前		2		○									兼1
	地球環境学		1・2・3・4前		2		○								兼1		

科目 区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考		
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	社会的	身体 の 理 解	スポーツ初級A	1・2・3・4前・後		1					○	1	2	1	1		兼1 兼1 兼1	
			スポーツ初級B	1・2・3・4前・後		1					○	1	2	1	1			
			スポーツ中級A	2・3・4前・後		1					○	1						
			スポーツ中級B	2・3・4前・後		1					○							
			スポーツ上級A	3・4前・後		1					○							
			スポーツ上級B	3・4後		1					○							
	地域 理 解	地 域 理 解	地域商業まちづくり学	1・2・3・4前・後		2			○									兼1
			歴史観光まちづくり学	1・2・3・4前・後		2			○									兼1
			減災福祉まちづくり学	1・2・3・4前・後		2			○									兼1
			地域商業まちづくり演習	1・2・3・4後		2				○								兼1
			歴史観光まちづくり演習	1・2・3・4後		2				○								兼1
			減災福祉まちづくり演習	1・2・3・4後		2				○								兼1
			上級まちづくり演習	2・3・4前・後		2				○								兼3
			小計(47科目)	—	0	88	0	—			1	2	1	1	0	兼23		
	言語と コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	言 語 と コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	日本語表現	1前・後	2				○									兼2
			日本語表現上級	1前・後	2				○									兼2
			基礎英語1	1前	1							○						兼2
			基礎英語2	1後	1							○						兼2
			英会話1	1前	1							○						兼1
			英会話2	1後	1							○						兼1
			実用英語演習1	2・3・4前	1							○						兼1
			実用英語演習2	2・3・4後	1							○						兼1
			情報英語演習1	2・3・4前	1							○						兼1
			情報英語演習2	2・3・4後	1							○						兼1
			手話	1・2・3・4前	1							○						兼1
			手話上級	1・2・3・4前	1							○						兼1
	小計(12科目)	—	6	8	0	—			0	0	0	0	0	兼5				
	理 情 解 報	理 情 解 報	情報処理基礎	1前	2						○						兼1	
			小計(1科目)	—	2	0	0	—			0	0	0	0	0	兼1		
			教 職 教 養	教 職 教 養	教育原理	1後		2			○							
	特別活動論	2前				2			○								兼1	
	道德教育論	2後				2			○								兼1	
	生徒・進路指導論	2後				2			○								兼1	
	小計(4科目)	—			0	8	0	—			1	0	0	0	0	兼3		
	小計(77科目)			—	16	122	0	—			5	5	4	1	0	兼36		
学 部 共 通 科 目	学 部 共 通 科 目	学 部 共 通 科 目	健康科学概論	1前	2			○			1	2					兼3	オムニバス オムニバス
			スポーツ科学概論	1後	2			○						1			兼5	
			スポーツ原理	2後		2			○									兼1
			スポーツ心理学	1後		2			○									兼1
			健康心理学	3後		2			○									兼1
			スポーツ社会学	2前		2			○									兼1
			スポーツ生理学	2前		2			○									兼1
			栄養学概論	2後		2			○									兼1
			健康レクリエーション論	2後		2			○									兼1
			医学一般(概論)	2前		2			○									兼1
			看護学概論	3前		2			○									兼1
			国際スポーツ健康事情	1・2・3・4前		2					○	1						集中
			スポーツ実技9(バレーボール)	2後		1					○							兼1
			スポーツ実技10(ソフトボール)	2前		1					○							兼1
			スポーツ実技11(スキー)	1後		1					○							兼1
			スポーツ実技12(アクアビクス)	2後		1					○							兼1
			スポーツ実技13(ウォーキング)	2後		1					○		1					
			スポーツ実技14(エアロビクスダンス)	2前		1					○							兼1
			スポーツ実技15(コンディショニング)	3後		1					○							兼1
			小計(19科目)			—	4	27	0	—			1	2	0	1	0	兼15

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
学 科 基 礎 科 目	こどもスポーツ教育論	1後	2			○				1	1			兼1
	こども健康教育論	1前		2		○								
	発育発達とスポーツ	1後	2			○				1				兼1
	生涯発達心理学	1後		2		○						1		
	地域スポーツ論	2後		2		○								兼1
	初等教育原理	2前	2			○								
	保育原理	2後	2			○			1					兼1
	障害児の保育と教育	3前		2		○								
	運動指導法Ⅰ（器械運動、ボール運動）	3後	1					○		1				兼2 オムニバス
	運動指導法Ⅱ（陸上運動、水泳）	3前	1					○			1	1		兼1 オムニバス
	児童の体つくりと動きつくり	1後		1				○						兼1
	こども運動指導論	2前		2		○				1	1	1		兼1
	こどもの表現運動	2前		1				○						
	レクリエーション・ニュースポーツ	2後		1				○						兼1
	アダプテッドスポーツ	3前		1				○						兼1
	小計(15科目)	—	10	14	0	—			2	1	1	1	0	兼9
学 科 専 門 科 目	こ だ も ス ポー ツ ・ 健 康 科 目	こどものからだの発育発達	3前		2	○				1	1			兼1
		こどものこころの発達	3後		2	○			1					
		こどもと健康	2後	2		○			1					兼1
		こどもの生活と健康行動	3後		2	○				1				
		こどもの運動遊び(伝承遊びを含む)	1後	2		○				1	1			兼1
		こどもの食と栄養	3前		2	○								
		こどもと地域社会	2後		2	○						1		兼1
		健康フィールドワーク	3前		1			○		1				
		教育・体力測定評価	3後		2	○				1				兼1
		学校保健・安全論	3前		2	○			1					
		生涯スポーツ論	2後		2	○				1				兼1
		健康レクリエーション実習	3前		2			○		1				
		こども家庭福祉論	3前		2	○								兼1
		障害者福祉論	3前		2	○								兼1
		発達障害と特別支援教育	3前		2	○								兼1
		こどもの医学	3後		2	○								兼1
		救急処置の理論と実習	2前		1	○								兼1 ※実習
		小計(17科目)	—	4	28	0	—			2	2	1	1	0 兼5
	初 等 教 育 科 目	体育科教育法(初等)	2前		2	○					1			兼1
		国語科教育法	2前		2	○			1					
		算数科教育法	2前		2	○				1				兼1
		理科教育法	2後		2	○			1					
		社会科教育法	2後		2	○					1			兼1
		音楽科教育法	3後		2	○				1				
		図画工作科教育法	3後		2	○								兼1
		家庭科教育法	3前		2	○								
		生活科教育法	2前		2	○								兼1
		初等体育	3後		2	○					1			
		初等国語(書写を含む)	3後		2	○			1					兼1
		初等算数	3前		2	○				1				
		初等理科	3後		2	○			1					兼1
		初等社会	3前		2	○					1			
		初等生活	2後		2	○								兼1
		初等音楽	4前		2	○				1				
		初等図画工作	4前		2	○								兼1
		初等家庭科	4前		2	○								
		教育課程の意義と編成	2前		2	○								兼1
		特別活動の理論と方法	2前		2	○								兼1 集中

科目 区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備 考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
学科専門科目	初等教育科目	道徳教育の理論と方法	2後	2			○									兼1
		進路指導・生徒指導論	2後	2			○				1					兼1
		教師論	1前	2			○									兼1
		教育心理学1	1前	2			○			1						
		教育心理学2	1後		2		○			1						
		教育の制度と経営	2後	2			○									兼1
		教育方法・技術論	2後	2			○			1						
		教育相談の基礎	3後	2			○			1						
		小学校教育実習事前・事後指導	4後		1		○			3	3	2				集中
		教育実習1(小学校)	3後		1				○	3	3	2				集中
		教育実習2(小学校)	4前		3				○	3	3	2				集中
		小計(31科目)	—	46	15	0	—			3	3	2	0	0	兼7	
	幼児教育科目	保育内容指導法(言葉)	2前	2			○			1						兼1
		保育内容指導法(環境)	2前	2			○									兼1
		保育内容指導法(健康)	2前	2			○									兼1
		保育内容指導法(人間関係)	2後	2			○									
		保育内容指導法(表現・音楽)	2後	2			○					1				
		保育内容指導法(表現・造形)	2後	2			○					1				
		保育内容総論	1後	2			○			1						
		保育課程論	2前	2			○			1						
		幼稚園実習事前・事後指導	3後		1		○			1		2				集中
		教育実習1(幼稚園)	3前		1				○	1		2				集中
		教育実習2(幼稚園)	3後		3				○	1		2				集中
		小計(11科目)	—	16	5	0	—			2	0	2	0	0	兼3	
	演習科目	教職実践演習(幼・小)	4後		2				○	4	3	4	0			
		専門演習	2前	2					○	5	5	4	1			
		研究演習	3通	2					○	5	5	4	1			
		卒業研究	4通	2					○	5	5	4	1			
		小計(4科目)	—	6	2	0	—			5	5	4	1	0	兼0	
	小計(63科目)		—	72	50	0	—			5	5	4	1	0	兼15	
合計(174科目)			—	102	213	0	—			5	5	4	1	0	兼67	
学位又は称号		学士(こどもスポーツ教育)		学位または学科の分野				体育関係、教育学・保育学関係								
卒業要件及び履修方法										授業期間等						
①NGU教養スタンダード科目 計22単位 〔キリスト教〕 4単位以上 〔自己理解と自己開発〕 4単位以上 〔社会的教養〕 6単位以上 〔言語とコミュニケーション〕 6単位以上 〔情報理解〕 2単位以上 ②専門科目 計114単位 〔学部共通科目〕 計10単位(必修4単位を含む) 〔学科基礎科目〕 計13単位(必修10単位を含む) 〔学科専門科目〕 計91単位(必修72単位を含む) 計136単位以上取得すること 注)各学期(セメスター)の履修制限単位は24単位										1学期の学期区分				2学期		
										1学期の授業期間				15週		
										1時限の授業時間				90分		

別記様式第2号(その3の1)

授 業 科 目 の 概 要				
(スポーツ健康学部こどもスポーツ教育学科)				
科目 区分	授業科目の名称		講義等の概要	備考
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	キ リ ス ト 教	キリスト教概説	建学の精神として本学の教育を基礎づけるキリスト教の精神を学ぶ。すなわち、聖書の示す人間観、世界観を学び、「人間とは何か」そして「人間がこの世界にあっていかに真実の生を生きうのか」という問題について考察する。とりわけ、それをもっとも明確な形で示したイエス・キリストの言葉と行為に触れ、限界をもった人間が、人として常に新しく生かされる可能性を与えられていることを知り、それが希望と力に満ちた生を生み出すことを理解する。	
		キリスト教学	「キリスト教概説」で学んだキリスト教の精神が、その後二千年の歴史の中で様々な形をとって展開され、提出されていった様子を学ぶ。具体的にはキリスト教の歴史、思想、倫理、文化等を学び、それらを通じて、聖書の示す使信がそれぞれの時代状況の中で、人々によってどのように受け止められ、表現され、生きられたかを理解する。そしてそれらが世界において果たした役割を知り、さらに今日どのような意味をもちうるのかについて考察する。	
	自 己 理 解 と 自 己 開 発	基礎セミナー	授業は演習形式で行う。本演習は、大学生活を有効に過ごすために必要な基礎的な素養を修得することを目的に、さまざまな社会現象を素材にして、自分の頭で考え、自分の言葉で表現できる能力と習慣を身に付けさせることを目指す。題材に関してはできる限り学生が身近に感じることで具体的な問題を取り上げ、レジュメの作成、発表・質疑応答を行う。	
		基礎セミナーⅡ	本演習の目的は自分を知る、すなわち自分を客観的に見つめ“将来を見据えて、それに向かって進もうとする自分”を発見する事である。具体的には現実のスポーツや教育などに関する諸問題を素材にして、自分で考え、自分の言葉で表現できる能力と習慣を身に付ける。レポートの作成やプレゼンテーション(報告)を取り入れ、ゼミナール形式で行う。講義テーマは1年次の基礎セミナーとほぼ同一であるが、レヴェルと内容が高度なものになる。	
		キャリアデザイン1a	時代とともに大きく変貌しつつある「職業を取り巻く環境」を的確に捉え、将来のキャリアを考えるにあたって、自分自身を知り、同時に社会の基本的なしくみや動きについても理解する必要がある。キャリアデザイン1aでは、社会の情勢変化を知ることからスタートし、さらに自分を取り巻く人間関係を交えて自分を振り返り、他者とのかかわりや社会の規範をふまえて自分を客観的に把握し、自分を深く知ることに取り組ませる。	
		キャリアデザイン1b	キャリアデザイン1aで学んだ「職業を取り巻く環境」と「社会的に見つめなおした自己」を再度見直し、将来のキャリアを考えるにあたって、自分自身を知り、同時に社会の基本的なしくみや動きについて、さらに深く理解を進める。キャリアデザイン1bでは、社会で求められる力とは何であるかを考え、常識力をアップさせることで、社会への対応力を身に付けさせることを目標とした学習を行う。具体的には論理的思考、推論、数的処理能力の向上をはかり、自己の適正能についても考えさせる。	
		キャリアデザイン2a	将来のキャリアを考えるにあたって、年齢相応の常識や態度、マナーを身に付け、社会へ飛び立つ準備をするために、自分自身を知り、同時に社会のしくみや動きを十分に理解する必要がある。このような状況を自己の問題として捉えることから始め、自分を取り巻く人間関係を交えて自分を振り返り、他者とのかかわりや社会の規範をふまえて自分を客観的に把握させるとともに、社会で求められる態度や能力を身に付けさせる。	
		キャリアデザイン2b	本格的な就職活動が始まる3年次の前に、就職活動の際に評価される常識力や基礎学力を身に付け、自分自身を再度見つめなおすためのプログラムを展開する。自己の職業興味領域や職業観を見つめることで、キャリアを選択する準備をさせるとともに、自己の志向するキャリアの方向性を定めさせる。	
		キャリアデザイン3a	卒業後の進路選択は、大学における学習の締めくくりであるとともに、次の生活への跳躍台である。一人一人の個性や適性にあったキャリア選択を行えるように、社会人として職業選択と就職活動に必要な基礎知識と経済・社会・国際・法律などの教養的知識を身に付けさせるとともに、就職プロセスにおける実践的課題やSPI対策など、自己啓発から自己表現、自己アピールの実践までを学習する。	
		キャリアデザイン3b	キャリアデザイン3aで学んだ卒業後の進路選択プロセスをさらに実践的に進める。大学における学習の締めくくりで進路選択において一人一人の個性や適性にあったキャリアを自己の力で認識し、それに向かって行動出来るように、社会人として職業選択と就職活動に必要な基礎知識と現代社会の教養的知識を身に付けさせるとともに、就職プロセスにおける実践的課題やSPI対策など、自己啓発から自己表現、自己アピールの実践までを学習する。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	自己 理解 と 自己 開発	ボランティア学 (オムニバス方式／全15回) (35 大宮 有博／3回) キリスト教の視点からボランティアの精神を捉える。 (16 水野 晶夫／8回) 次に、社会学や経済学からのアプローチを学び、ボランティア活動の学術的な意義を理解する。 (17 増田 喜治／4回) さらに、「国際交流」「環境」「まちづくり」など各分野を横断的にとらえ、他者への理解、社会への関心を深める。	オムニバス方式
		ボランティア演習 ボランティアなどの公共的な社会活動に参加し、体験を通じて人間関係のあり方を学ぶとともに、社会に対する関心と人間関係形成に不可欠なルール意識を高め、社会の担い手側の視点を育むことを目的とする。月1～2回程度の授業を開催し、オリエンテーション・事前学習、実習先の決定、中間報告、ふりかえりプレゼンテーション・事後学習を行う。実習期間の実習記録及び実習レポートの提出と合計20時間以上の実習時間を必須事項とする。	演習22時間 実習20時間
		インターンシップ 学生として社会のあり方を学習する上で不足しがちな現場実践、社会的体験を、様々な事業所における就業体験を通して獲得させる。具体的には国・地方自治体など行政機関、国連機関などの国際的機関、公益法人やNPO法人、一般企業などで現実の業務を体験し、それぞれの社会的な存在意義・理由を知ると同時に、そのような現場で働くことの意味を考え、自らの行動や将来のキャリア形成のモデルとして考えさせる。	
	社 会 的 人 間 理 解 教 養	哲学 本講義は、始めて哲学を学ぶ者のために哲学の諸問題を説明し、「哲学的な考え方」に慣れさせる。それによって、常識的な思考の多くが時代や地域性に制約されたものであること、ときには先入見にすぎないことを理解させ、世界観や人間観に関する多様性を考えさせる。とりわけ形而上学の基礎を考えさせることによって、科学的な考え方、宗教的なものの見方の意義と制約について会得させる。	
		哲学史 哲学を学ぶことは哲学史の知識を学ぶことではないが、「哲学する」ことを学ぶには、哲学史上の知識は必要である。本講義では、西洋哲学史の流れに即し、各時代の主要な哲学者、著作、そこでの主な問題、使われている諸概念等をできるだけ整理して紹介する。とりわけ、各時代に特徴的な問題については、現代的に問い直して紹介する。その考察を通じて、自ら思考する訓練をおこない、ひいては思考法全般への入門の一助としたい。	
		心身関係論 本授業の前半では、心身関係の具体的な事例を考察する「前の」、そこにある理論的な問題を《哲学的に》考える。心身のとらえ方がむしろものの見方に依拠していることを理解する。具体的には、デカルトの心身二元論の成り立ちやその後の哲学史上の問題、現代科学・現代哲学における心身関係のとらえ方を紹介する。後半では、「謎である」ことを踏まえ、私たちの心の仕組みについての一つのモデルを考える。そこでの焦点は、時間と空間という枠組み、それと心の複数性と一性の関係である。	
		心理学概論 心理学とは「行動を科学する」学問である。「長い過去と短い歴史」といわれるように、学問的には19世紀中ごろから成立したが、人間が「こころ」に興味を抱いたのは、人間としてその発生初期からであるといっても過言ではない。本授業では、基礎心理学の学問領域に焦点を置き、現代心理学が学問的に明らかにしてきたいくつかの基本的領域について講義する。	
		キリスト教人間学 人間は、神の愛によって造られた善美なる存在、歴史的文化的な共同体の創造に参加するものたち、また、悪や罪をも可能性として秘めもっている存在とのキリスト教的人間観に立って、人間の尊厳、生と死、フェミニズム、ジェンダー、家庭と子ども、人類愛と社会正義、人間以外のいのちとの連帯共生などについて広く、深く学ぶ。	
		死生学 人間が生きている以上、死は確実にやってくる。そこで、講義においては、1) 死の意味するものを考える(死から生へ)、2) ホスピスでの癌患者さんの死に対する考えから学ぶ、3) 安楽死と尊厳死の問題、4) 高齢化と死の問題、5) 臓器移植と脳死の問題、6) 代表的な宗教(仏教とキリスト教)における死生観の比較等のテーマに沿いながら学び、死に対しての準備をする中で生きることにつながる授業を行なう。	
		臨床心理学 臨床心理学は、人々の示す不適応問題に対する心理学的援助を模索する中で発展してきた実践的学問である。臨床心理学では、臨床心理学の歴史的変遷の中で登場した様々なトピックスを取り上げながら、主に発達障害や精神障害に関する臨床心理学の基礎理論、心理アセスメント、心理療法について概観する。	
		倫理学 現在、動物及び人間の生命をめぐる、様々な倫理的問題が生じている。例えば、動物の生命をめぐる、多くの動物種が絶滅危機にあるという問題や、飼えなくなった犬や猫の殺処分問題などがある。人間の生命をめぐる、代理出産の問題や、脳死者からの臓器移植の問題などがある。これらの問題について、一つ一つ概説していく。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	社 会 理 解	社 会 学	社会学入門	本講義は、前半(第8回まで)で、身近な事例を社会的に読み解くことを通して基礎的な理論を身に付け、後半で、現代社会における個別のトピックを社会学の方法を用いて理解する。身近な社会現象がどのようになりたっているのかについて社会学のツールを用いて考えることにより、社会的なものを見方を身に付ける。映像メディアなどを用いたわかりやすい講義を目指す。	
			宗教社会学	本講義は、社会学、なかでも宗教社会学の基礎を身に付け、現代社会における宗教をめぐる諸問題を適切に理解することを目的とする。新宗教論から宗教組織論、ファンダメンタリズム論まで幅広く取り上げ、また海外の事例にも目を配る。映像資料を活用し、わかりやすい講義を目指す。	
			日本国憲法	本講義は、憲法上の『人権』について、歴史的考察や現代的考察を行い、その重要性を再確認する。更に、様々な事例を中心に日本国憲法を検討していくことにより、受講者が、日本国憲法の知識と考え方を身に付けられるようにすることを意図する。	
			現代社会と法律	本講義は、法の存在意義を検討することはもちろんのこと、日本の法にはどのようなものが存在するのか、そして、われわれのよく知る「法律」との関係はどのようなものなのかを理解してもらうことを目的とする。単なる概念説明に終わるのではなく、様々な事例を中心に講義を進めていく。	
			暮らしと法律	本講義では、新聞記事、雑誌記事、マンガなども取り上げ、皆さんの日常生活において法がどのように関わっているのか、そして皆さんが今後生活していく上で必要な法の知識と考え方を身に付けてもらうことを目指します。	
			現代社会と経済	経済学の基礎的な理論について概説する。前期(ミクロ経済学)では、家計や企業といった個々の経済主体の行動を分析し、さらに、それらを通じて個々の財の市場ではどのようにして価格や生産量が決定されるかを検討する。後期(マクロ経済学)では、国民所得の概念を中心として、失業やインフレーション、さらには国際収支等々の諸問題が、なぜ、どのようにして起こるのか、そしてそれらに対して政府がどのような経済政策をいかに運営していけばよいのか、といった課題に取り組む。	
			会計入門	本講義の目的は、受講生諸君に会計とはどのようなものであるかという基礎的な知識を身に付けてもらうことにある。現代社会では、個人・企業・公益法人・NPO法人などが経済活動を行っているが、その活動内容を把握し、報告し、より優れた活動方針を決定するときには、会計報告が必要不可欠である。また、国民の義務である適切な納税も会計報告をもとに決定される。さらに、銀行が、企業に融資するかを決定するときも会計報告は重要な判断材料である。このように私たちの生活は会計と切り離すことはできない。そこで、本講義では、「財務会計」、「管理会計」、「会計監査」等の会計の発展領域の基礎である「簿記」を中心に学習する。	
			現代社会と福祉	この講義は、福祉系の教養科目として、特に福祉を専門としない学生に対して、「福祉」の視点から現代社会の諸問題を考える意識を高め、また現代社会における「福祉」のあり方や福祉政策の体系に関する基本的な理解をすすめることで、福祉政策の視点から現代社会の課題や方向について考える力を身に付けることを目的としている。 この講義では、福祉や福祉政策を支えている「現代の経済社会」、これまで福祉政策を引っ張ってきた「福祉国家」とそれを支えてきた「社会保障」、そして、これからの福祉や福祉政策を導いていく「福祉社会」の展望に焦点を当てて、福祉政策の展開、現状及び展望について解説する。また、それに合わせて、現代の福祉政策に関するさまざまな問題をトピック的に取り上げ、これからの福祉政策や総合社会政策が展開すべき方向や抱える政策課題について考える。	
	自 然 理 解	自 然 学	数学	大学生の素養としての数学(微積分、線形代数など)について、特に微積分を中心に解説する。微積分についてはその定義の意味するところ、計算方法、応用に分けて解説するが、特に応用の第一歩として、実際の計算により関数の正確なグラフを描くことができるようになることが第一の目標である。講義では、具体的な問題に繰り返しあたり微積分の操作に習熟することを通じて、その考え方に慣れることを狙う。	
			統計学	人の気持ち、株価、景気、野菜の値段、等々、不確定な変動を見極めようとするれば、その背景にある様々な相互関係を解きほぐして何か法則がないか探る必要がある。また、国の経済はどうなっているのか、地域の状態は良いのか、といった対策は効果があったのかなかったのか等、知りたい情報を解き明かす方法を考える。	
			化学	錬金術から近代化学の成立に至るまでの推移を考える。錬金術と原子核反応、ラポアジェの質量不変の法則とアインシュタインの特殊相対性理論など、当時と現代の類似した科学的できごとを対比して取り上げたい。次いで、元素・原子・分子、元素の周期律と分類、原子の構造、電子の配置、化学結合、酸と塩基、化学反応及び酸化と還元について、日常の生活の中で起こっているできごとを取り上げる。基礎的な化学を通して、科学的なものを見方考え方を理解し、バランスのとれた物質観、ひいては世界観を養う一助になることを主眼にしたい。	
			生物学	動・植物の違い、細胞の多様性・共通性、生命の連続性、遺伝の仕組み、環境と動・植物の反応、生命・生命現象と物質の関係、生物の特殊性・異特性や曖昧性をもとに生物(人間)に共通する諸器官系及びバイオテクノロジー技術を含め解説し、人間とは何かを理解させる。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
N G U 社 会 的 教 育 学 科 目	自然	理解	地球科学概論	地球人の活動範囲は著しく広くなり、地球上の至るところへ行くことができ、特殊な訓練をつめば宇宙まで行くことができる。その反面、地球の環境は著しく変化している。本講義は、地球がどのような姿をしているか、また地球環境がどのように変化してきたかを認識する。地球は大きく見て三つの異なった相から構成されている。気圏、水圏、岩圏である。固体地球ではこの三つの相があい接し、互いに複雑な作用を行っている。固体地球表面は大気と接する陸と海洋と接する海洋底からなり、これらは際立った対立を示している。地球科学の最近の情報を講義したい。	
			地球物理学概論	1910年頃ドイツの科学者ウエゲナーが海岸線の類似性から大陸移動説を唱えた。不動と考えられていた大陸を移動可能と考え、海洋底は年々生産され、しかも海溝で消滅する。従来説明困難であった事柄が説明できるようになった。観察の学問である地球科学に新しいデータが加わると学問体系も変化していった。今や、地球の誕生から現在まで地球に生じた変化を読みとれる時代になってきた。本講義はこのような変遷について学ぶ。	
			人類学	本講義は、人類の移動の歴史を生態、文化、経済とからめて理解することを目指す。約500万年前にアフリカで誕生した人類は、まずアジア、ヨーロッパへと、さらに、数万年前に南北アメリカ大陸、オーストラリア、オセアニアへと居住地を拡大した。歴史時代には、いくつかの民族の大移動ののち、大航海時代にヨーロッパ人による植民地化がはじまった。今日、仕事を求めた人の移動(移民)が世界規模で起きている。これら、人類の移動の歴史を人類史に位置づけて解説する。	
			物理学	ものを作る際、全体の構造の設計や強度の確認などには、材料の物理的な性質や力学を考えた計算が必要になる。物理学は単なる思い付きを集めたものではなく、きちんと検証された「法則」をまとめたものである。「法則」とは、誰が何度確かめても同じ結果になるものだけを選び抜いたものである。また、それぞれの法則の間に矛盾がないことも確認されている。「なぜ」「どうして」という問をつきつめて考え、きちんとした法則にまとめることで、世の中の仕組みを理解しようとする学問である。	
	歴史	文化理解	生命倫理	昨今の生命倫理的論争の多くは、キリスト教を基盤として形成された西欧の社会において行なわれている。生命倫理の発生と歴史を理解する為にはキリスト教的な世界観や人間観の理解が重要であるとのことを物語る。さらに、仏教的伝統の強い日本社会においても、昨今脳死や安楽死の問題が浮上されており、大きな論争的になっている。こうしたことは、生命倫理のテーマを論じるに当たって、宗教的伝統についての理解が欠かせないことを意味するといえよう。本科目は、生命倫理について諸分野の考え方と対話しながら、現代社会におけるキリスト教的生命倫理の成立可能性について論じる。	
			日本史	小学校から高等学校まで、すでに日本の歴史は何度も学習してきているが、ややもすればそれは断片的な歴史的事象の年次的羅列に陥りがちである。本講義では、歴史が原因と結果の連鎖であることを学生諸君が意識できるように、とくに政治と社会の歴史を中心に講義を進めていく。また、日本史の講義ではあるが、アジアを中心とする国際社会との関わりもできる限り視野に入れる。	
			日本文化史	高等学校までの文化史の授業は文化財の名称や芸術家の氏名の羅列に終始する傾向があり、実際の文化財の美しさや芸術性に触れる機会は少なくがちである。そこで本講義では、できるかぎり写真や動画のほかデジタル機材を利用して、日本の伝統的文化財の芸術性を体感させることを意識している。また、大学近郊の文化財への実地見学を取り入れるなど、学生が日本の文化に直接親しむ機会をつくることも意図している。	
			文化人類学入門	本講義は、文化人類学の基本的知識及び方法論を、特に宗教と医療に関するテーマをとりあげながら、習得することを目的とする。全体を3部構成とし、第1部を文化人類学の視座、第2部を信仰と世界観、第3部を医療の文化とし、それぞれ以下の順序で講義を行う。第1部:人類誕生と文化、言語とシンボル、親族理論、人類学の歴史。第2部:葬送と靈魂観、儀礼と時間、身体とケガレ。第3部:病気と文化、シャーマニズム、グローバル化する近代医療、心と社会。	
			陶芸論	現在の社会において、芸術、美術の持つ役割は大きくなっており、持たれる関心の度合いも大きくなっている。芸術というと一般的には、美術館等で鑑賞するものという意識があるが、芸術、美術はもっと身近にあり、気軽に触れ合えるものである。本講義では、やきものを通して受講者にそうした事を伝え、共に芸術、美術について考えていく。	
			陶芸演習	やきものづくりの技術は色々あり、簡単なものから難しいものまで様々である。しかし、技術は道具の一種であり、技術がものをつくるわけではない。作者が何をつくりたいのか、それを助けるのが技術であり、無い場合には新しい技術を開発するのである。本講義では、実習形式により、やきものづくりの楽しさ、厳しさに触れるとともに、やきものに関する自分なりの見方や考え方を身に付ける。	
	環境	環境理解	環境科学	エネルギー文明の中で、環境汚染の発生原因、自然界へ及ぼす影響及び発生抑制について考える。具体的には、化石エネルギーの大量消費によってもたらされる大気汚染、酸性雨及び地球温暖化、また、フロンガスによるオゾン層の破壊、DDTやBHCなどの農薬被害、ごみの焼却により発生するダイオキシン、自然界へ流出した化学物質による環境ホルモンの影響、肺ガンを誘発するたばこの煙、さらに、紫外線及び放射性物質などの問題について考える。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考	
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	環 境 理 解	生態学	21世紀に入って人間の生存や文明社会持続の前提として、地球環境の保全が重要視されており、本講義では1生物圏の動態や2個々の生物種の生活史を解明する科学的方法としての生態学を論じる。1では熱帯環境に見られる生物多様性など具体的な地域情報をベースに自然の構造を紹介し、2の観点では主として霊長類などを素材として種の生活史に基礎づけられた生物群集のメカニズムや種内・種間の社会的諸関係について教授することにより、生物学を専門としない初学者に生物的自然のあり方を理解させる。		
		地域生態論	自然、人間社会、文化構造など多くの条件によって多義的に表現される地域概念を、自然とりわけ生物社会のありようと人間の具体的な生活との関係として捉え、人間活動の基盤としての自然の重要性を理解させる。具体的な事例として日本の里山環境、アマゾン熱帯林における自然共生型の生活、中国の辺境に暮らす少数民族の文化と自然観などを取り上げ、現地から得た資料や映像を駆使して実感のともなう地域学習を展開する。		
		地球環境学	地球は太陽系の中でも、特異な環境を持つ。地球以外の惑星や多くの衛星には地球のような穏やかな自然は存在しない。これは地球の大きさや太陽からの距離、また地球の形成の条件で決まったものである。この環境により、地球のみ、生物が誕生し、進化した。この進化は地球環境に生物が適応し、さらに、生物の進化と共に地球環境も進化した。その結果が、現在の地球であり、この現在の環境は地球誕生時の環境と著しく異なるものである。地球の誕生から現在まで、環境の変遷と現在地球で問題になっている地球環境の変化を論じる。		
	身 体 の 理 解	社 会 的 教 養	スポーツ初級A	本授業は、主に学校教育課程でも多く見られる団体種目系について、初心者レベルを対象に実技形式で実施する。種目は、サッカー・バレーボール・バスケットボール・ソフトボール・ラグビー・スキーから選択する。	
			スポーツ初級B	本授業は、主に学校教育課程でも多く見られる団体種目系について、初心者レベルを対象に実技形式で実施する。種目は、サッカー・バレーボール・バスケットボール・ソフトボール・ラグビー・スキーから選択する。	
			スポーツ中級A	本授業は、生涯スポーツの要素が強く個人または少人数で実施可能な種目について、実技形式で実施する。対象者は、ある程度基礎的な技術を持つ者、並びに「スポーツ初級A」又は「スポーツ初級B」を受講し単位を取得した者とする。種目は、テニス・バドミントン・ゴルフ・卓球・スキーから選択する。	
			スポーツ中級B	本授業は、生涯スポーツの要素が強く個人または少人数で実施可能な種目について、実技形式で実施する。対象者は、ある程度基礎的な技術を持つ者、並びに「スポーツ初級A」又は「スポーツ初級B」を受講し単位を取得した者とする。種目は、テニス・バドミントン・ゴルフ・卓球・スキーから選択する。	
			スポーツ上級A	本授業は、専門的にその種目に取り組んでいる者、並びに「スポーツ中級A」又は「スポーツ中級B」を受講し単位を取得した者を対象に、実技形式で実施する。	
			スポーツ上級B	本授業は、専門的にその種目に取り組んでいる者、並びに「スポーツ中級A」又は「スポーツ中級B」を受講し単位を取得した者を対象に、実技形式で実施する。	
	地 域 理 解		地域商業まちづくり学	本講義は、商店街とそれに関連する地域コミュニティを対象として、講義形式で商店街の歴史や施策、現況やそれを取り巻く環境を概説し、商店街活性化の方向性や社会的意義の基本的理解を得ることを目的とする。特に、コミュニティビジネスやまちづくり施策との関連性を中心にその成功事例を取り上げて、商店街活性化に必要な資源や施策について考察する。	
			歴史観光まちづくり学	本講義は、観光地あるいは(歴史的)観光資源を有する地域におけるまちづくりを対象として、講義形式で観光の社会的意義や観光の歴史、国内外の観光の実態等の基礎を学ぶとともに、とりわけ地域の歴史を通じて、観光資源の評価と抽出、また観光政策のあり方についての基本的理解を得ることを目的とする。特に、地域の歴史的資源をいかに観光まちづくりとして再構築していくか、また観光資源をどのように評価等していくか等について考察していく。	
			減災福祉まちづくり学	本講義は、今後発生が予想される南海トラフ地震や大型台風・集中豪雨に対する減災まちづくり、および日常的取組みとしての福祉まちづくりを対象として、講義形式でこれまでの災害史と復興支援対策、コミュニティとレジリエンス、情報伝達、現状の防災対策等の実態の基礎を学ぶとともに、「減災まちづくり情報システム」を活用した減災福祉まちづくりへの取り組み方法を学ぶ。特に災害の影響は社会的弱者に大きいため、福祉的視点を取り入れたまちづくりを学んでいく。	
			地域商業まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。地域商業まちづくり学で培った知識を基礎として、受講者自らが商店街や地域コミュニティに関連する課題を調べ、内容を検討し、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および現地調査などを行い、課題解決策について検討する。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の概要	備考
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	社 会 的 教 養	地 域 理 解	歴史観光まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。歴史観光まちづくり論で培った知識を基礎として、受講者自らが観光でにぎわっている地域や(歴史的)観光資源が蓄積している地域について、現状および将来展開していくうえでの地域実態や課題の整理、その課題解決策を提示するために、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および現地調査などを行い、まちづくり提言について検討する。特に本学が立地する名古屋市および瀬戸市を中心に演習フィールドとしていく。	
			減災福祉まちづくり演習	授業は演習形式を基本とする。減災福祉まちづくり論で培った知識を基礎として、受講者自らが減災に関心の高い地域に入っていく、地域住民との情報交換や交流を通じて、地域実態や住民意識、地域対応能力等について把握し、そこでの減災福祉上の課題の整理、その課題解決策を提示するために、教員と受講者との質疑応答、受講者同士の討論および地域に入っていくの現地調査などを行い、まちづくり提言について検討する。特に本学が立地する名古屋市南部エリアを中心に演習フィールドとしていく。	
			上級まちづくり演習	授業は演習形式を基本に行う。3つのまちづくり演習のうちどれかひとつを履修したものだけが受講できる。これまでに学修してきたまちづくりに関する知識・論点の中から自ら課題テーマを設定したうえで、これに対する教員や受講者との質疑応答・討論や現地調査を通じて、具体的な課題解決プランを作成し、関係者の協力のもとで実際の活動を行い、その成果と課題についてレポートする。	
	言 語 と コ ミ ュ ニ ケー シ ョ ン		日本語表現	本授業は、授業を聞いて、効率的にノートを取ったり、レポートを書いたり、人前で要領よく話をするなどという、日常生活の中で常に必要な能力を伸ばすことを目的とする。具体的には、課題に対する三分間スピーチ、敬語の使い方、集団討論を通したディベート、三百字小説、図形を言葉で説明するなどという作業を通して、それらの能力の向上をはかる。	
			日本語表現上級	日本語を読み、聞く能力や、日本語で書き、話したりする、より高い能力を身に付けさせる。基礎的な知識やその応用は、既に「日本語表現」で終えているので、本講義では、より生きた表現能力が身に付くように、それぞれの課題に応じた応用練習問題に取り組ませたり、具体的な作品を読みながら、そのレポートを書いたり、口頭で説明させたりする作業などを行う。	
			基礎英語1	本授業では、速読に重点を置いたreading演習を通して、英語に関する基本的事項の確認とその定着をはかる。具体的にはe-learningを導入し、受講生は、ネット上にある問題を解く演習形式で授業は進められる。演習はvocabulary building、readingの各パートから成っており、各レッスンは日常生活に関するもの、ビジネスに関するもの、あるいは旅行に関するものなど何らかのトピックが設定されている。またこれらの活動と並行して、インターネットを活用し、英語で書かれたHPを読み、課題に沿った情報を読み取り、ファイルのまとめる活動を行う。	
			基礎英語2	本授業は、「基礎英語1」に続いて、速読に重点を置いたreading演習を通して、英語に関する基本的事項の確認とその定着をはかる。具体的にはe-learningを導入し、受講生は、ネット上にある問題を解く演習形式で授業は進められる。演習はvocabulary building、readingの各パートから成っており、各レッスンは日常生活に関するもの、ビジネスに関するもの、あるいは旅行に関するものなど何らかのトピックが設定されている。またこれらの活動と並行して、インターネットを活用し、英語で書かれたHPを読み、課題に沿った情報を読み取り、ファイルのまとめる活動を行う。	
			英会話1	本授業は英語で行われ、正確に英語を理解する能力を向上させることが目的である。音声のみならず、教員の身振り、手振り、口元、顔の表情などに細心の注意を払って、聞き取る心構えが必要である。テキストは各教師によって異なるが、全体学習、グループ討論、課題学習などが各教員の指示によって行なわれる。	
			英会話2	本授業は英語で行われ、「英会話1」に続いて、正確に英語を理解する能力をさらに向上させることが目的である。音声のみならず、教員の身振り、手振り、口元、顔の表情などに細心の注意を払って、聞き取る心構えが必要である。テキストは各教師によって異なるが、全体学習、グループ討論、課題学習などが各教員の指示によって行なわれる。	
			実用英語演習1	海外旅行や語学留学でよく用いられる英語の語彙や言い回しについて学習し、実用的な英語運用能力を高める。またそれらと並行して、海外の人々とのコミュニケーションを円滑に進めるにはどのような心構えや配慮が必要なのかを、日本人と英語圏の人々との表現方法やジェスチャの違い、ものの捉え方の差などについても理解を深める。	
			実用英語演習2	実用英語演習1に引き続き、海外旅行や語学留学でよく用いられる英語の語彙や言い回しについて学習し、実用的な英語運用能力を高める。またそれらと並行して、海外の人々とのコミュニケーションを円滑に進めるにはどのような心構えや配慮が必要なのかを、日本人と英語圏の人々との表現方法やジェスチャの違い、ものの捉え方の差などについても理解を深める。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
N G U 教 養 ス タ ン ダ ー ド 科 目	言語とコミュニケーション	情報英語演習1	本授業では、インターネット上のさまざまな情報を用いて、英語による情報交換・情報検索・情報発信をするための基礎的な能力を身に付ける。具体的には、インターネット上から入手可能なバラエティに富んだ英文を読解したり、電子メールをやりとりしたり、検索サイトを使って調査を行ったり、プレゼンテーションを練習する。また、パソコン以外の機器を利用する授業では、映像や音声素材として、より実践的に英語を運用するために必要な能力が身につくよう展開する。
		情報英語演習2	本授業では、インターネット上のさまざまな情報を用いて、英語による情報交換・情報検索・情報発信をするための基礎的な能力を身に付ける。具体的には、インターネット上から入手可能なバラエティに富んだ英文を読解したり、電子メールをやりとりしたり、検索サイトを使って調査を行ったり、プレゼンテーションを練習する。また、パソコン以外の機器を利用する授業では、映像や音声素材として、より実践的に英語を運用するために必要な能力が身につくよう展開する。
		手話	手話は「言語」である。聴覚障害者の手まねとして、長く偏見の目にさらされてきた「言語」でもある。手話は福祉関係者だけの狭隘なものでもなく、ボランティアと同義語でもない。本授業では、「言語」としての手話を、誰でもが、気楽に学べるよう、テレビドラマ、映画、歌などを副教材にして、手話の読解力と表現力の初歩を修得する。
		手話上級	手話は「言語」である。聴覚障害者の手まねとして、長く偏見の目にさらされてきた「言語」でもある。手話は福祉関係者だけの狭隘なものでもなく、ボランティアと同義語でもない。本授業では、「手話」受講者もしくは手話の初歩を修得した者を対象に、手話の読解力と表現力の応用を修得する。
	情報理解	情報処理基礎	現代社会においては、インターネットを始めとして多様な情報が流通し、利用されている。また、どのような分野においても、情報というものを処理することにより問題を解決し、判断をすることが行われている。情報処理に関する基本技能や基礎知識は、大学生が基礎教養として学習しなければならないものとなっている。本授業は、ノートパソコンで例題を演習する実習形式で、ワープロソフトによる文書作成、表計算ソフトによるデータ処理、及びネットワーク利用に関する最低限必要な知識や技能を身に付ける。
	教職教養	教育原理	教育という営みは、教授過程と学習過程から成立するものである。学生のこれまでの教育との関わりは、もっぱら教えられる側、学ぶ側に身を置き、学習過程を経験することが中心であったであろう。それが、教職を志すという立場に立つことで、今度は教える側になり、様々な教育現象を捉え、対処することが求められるようになる。すなわち、本講義を受講することから、教授過程への第一歩を踏み出すわけである。 そのため、本講義は、教育学への入門的性格を有している。教育学の各領域を概観しながら、教育に関わる諸現象を多角的・多面的に捉える。
		特別活動論	本科目においては、学生（個人あるいはチーム）が主体となって、「特別活動」あるいは「総合的な学習の時間」におけるいずれかの活動を選択して、その性質を探究したうえで、そのよりよい在り方（授業案あるいは計画案）を提案するプロジェクトを実行する。プロジェクトにおいては、課題に対しての調査分析（少なくとも1回のフィールドワークを含まなければならない）を通して、最終報告書（提案書）を作成し、プレゼンテーションを実施する。
		道徳教育論	本講では、道徳に大きな関心を表わす林竹二、灰谷健次郎、谷昌恒、梅原猛、当該担当教員の書物、研究論文などを通じ、また、宮沢賢治の作品、ボランティア活動記録、中学校学習指導要領、聖書などを参考資料として、道徳教育論の授業をすすめ、受講者が道徳的指導力、実践力を身に付けることを目指す。各講義の後半で、受講者に「生きる意義、いのちの尊さ、正義、愛、平和、差別、悪、利他、エゴ」などからテーマを選び、そのことについて発表する機会をも設ける。
		生徒・進路指導論	現在の学校教育において、生徒一人ひとりに規範意識を育成していくことが、生徒指導・進路指導・教育相談を推進していく上で、重要な役割を果たしていることを認識するとともに、規範意識を育成するために教育活動を地道に実践している学校や教師の姿勢を視聴（DVD）したり、具体的な生徒指導・進路指導・教育相談の実践指導事例を読んだりして、教師の子どもに対する関わり方、対応の仕方の基礎を養う。

科目 区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 部 共 通 科 目	健康科学概論	毎日の生活を健康に過ごすことはヒトの一生を通しての重要な課題である。児童期、青年期、中年期、壮年期、高齢期と様々なライフステージで多くの健康課題が存在する。本授業では、健康の定義や健康に関連する様々な要因、および社会的施策などの理解を通して、総合的に健康を理解する。授業はオムニバス形式とする。 (オムニバス方式／全15回) (31 酒井 淳一/3回) 健康に関する定義や要因などの概論を講義する。 (30 山本 親/2回) 中高年期の健康問題について講義する。 (7 坂井 智明/2回) 中高齢期における運動の効果について講義する。 (1 野村 良和/3回) 健康のための保健政策や地域社会の取組について講義する。 (6 中野 貴博/3回) 発育発達期における健康・体力問題について講義する。 (36 金 愛慶/2回) こころの健康について講義する。	オムニバス方式
	スポーツ科学概論	スポーツ科学は人文・社会科学から自然科学の総合領域科学であり、細分化されたそれぞれの領域で研究が進歩している。種々の領域における重要なトピック、知見を例示し、スポーツ・体育を科学的にとらえるためのアプローチの内容を講義する。 (オムニバス方式／15回) (32 吉田 正/3回) スポーツの生理・心理学の概論を講義する。 (33 齋藤 健治/3回) スポーツのバイオメカニクスの概論を講義する。 (39 早坂 一成/2回) スポーツと社会、歴史の概論を講義する。 (40 松田 克彦/2回) トレーニング、コンディショニングの概論を講義する。 (49 廣 美里/2回) スポーツのルール、戦術、指導の概論を講義する。 (14 沖村 多賀典/3回) スポーツと法・行政・経済とのつながりの概論を講義する。	オムニバス方式
	スポーツ原理	体育・スポーツ全般に関わる内容で指導者のための教育実践の指標となる原理・原則を扱う理論的研究をベースに講義を行う。主な内容は、体育・スポーツが内包する様々な問題、体育・スポーツによる身体形成や人間形成、スポーツと政治、スポーツの商業化、ドーピング、ナショナリズム、体罰問題、勝利至上主義、フェアプレーとスポーツマンシップなどについて行う。	
	スポーツ心理学	スポーツ心理学では、競技者のみならず子どもから大人すべてのスポーツに携わる人の心理的な変化やスポーツから受ける影響について学習する。競技者が直面する緊張やスランプに関するトピック、子ども達が運動成就を通して養う有能感など、スポーツ場面やレベルごとに発生する心理的な効果と効果について理解することで、スポーツや運動を指導する際に役に立つ知識を学習する。	
	健康心理学	健康心理学は、人の健康を取り巻く諸問題を総合的に研究する心理学あるいは行動科学である。主な死因が感染症から癌や心疾患といった生活習慣病へと変化したことに伴い、健康の維持・増進における予防の重要性や健康な生活習慣が一層強調されるようになった。 本講義では、このような個人や地域社会での健康問題に対するアプローチとして、個人の健康観や生活習慣といった認知的・行動的側面に焦点を当て、乳幼児期から老年期までに必要となされる健康教育及びストレスマネジメント、不健康な生活習慣の改善のための新たな健康行動の形成、ヘルスシステムの維持・管理などに関する健康心理学的知見とそのサポート法について概観する。	
	スポーツ社会学	現代社会におけるスポーツに関する諸問題や副次的に影響を与える事象について、社会学的な観点から考察を進め、スポーツにおける基本的な社会学用語の習得と見方や考え方を涵養する。そのために、スポーツを文化としてとらえ、私たちの日常生活の身近なスポーツ現象やトピックスを取り上げて、これらの事象から考察できる社会的影響や文化的要素を探究する。さらに、オリンピックやワールドカップなどのグローバルな観点から、現代日本社会の少子化が及ぼす子ども世代とスポーツとの関係など広義にわたる事象を取り上げる。講義の進め方としては、各テーマに沿ってトピックスの提示、スラドドによる説明を行う。並行してキーワードや基本的な用語を記入して知識を習得する。さらにこれまでのスポーツ事象についての映像を視聴して、これからのスポーツの社会的事象の可能性について考える。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 部 共 通 科 目	スポーツ生理学	スポーツ生理学は、ヒトが運動を行った際の生体の反応や機能及び適応能力について系統的に究明し、その法則性を学習する。具体的には、筋の組成や代謝、呼吸・循環系、神経系等がどのようにに関わり、運動時に身体が機能しているか、さらにそれぞれの組織が短期的・長期的にどのように適応しているか、そのメカニズムを科学的に理解することを通してヒトのパフォーマンスやトレーニング効果を考える。	
	栄養学概論	健康を保持・増進し、疾病を予防するためには、栄養に関する正しい知識をもつことが必要である。この講義では、我々を取り巻く食環境の現状を知り、食と健康とのかかわりについて、栄養素の種類、摂取状況と1日必要量、体内での役割、体内代謝等について、さらに食品と含有栄養素について学ぶ。これらの基礎事項をもとに、各ライフステージ、あるいは特殊環境における栄養摂取について学ぶ。	
	健康レクリエーション論	身体健康維持や子どもの発育発達・コミュニケーションの伸長においてレクリエーションは有効である。ストレッチやウォーキング、レジスタンス運動のようにいつでもどこでもできるものから、ボールなどの小道具を使うもの、集団で行うゲーム的要素を持ったものなど、様々な年齢層に楽しませている。こうした身体活動を通して、生活を豊かなものにするにより、各ライフステージでの健全な健康維持にもつながる。授業では、レクリエーション援助者として、レクリエーション活動の意義と必要性を知り、様々な環境におかれた人々の心豊かな生活の援助ができるようになることを目指す。さらに、こども世代の教育・福祉分野におけるレクリエーション活動の援助技術や援助計画についての知識と実践について学ぶ。	
	医学一般(概論)	少子高齢化社会となり、現代の医療・医学は多様化し治療される側の意識も大きく変化している。しかし、医療の本質は変わらず、医師を含めた保険医療福祉専門職者の最善、最良の質の高い医療提供が重要となっている。本講義では、医学の本質、医学がなんであるか、どのような方向に発展しつつあるかを、医学の進歩の歴史をたどり、生物としての人間の疾病像、病気の人間の姿、そして医学がどのように社会に受け入れられているかを通して、医学の意義や目的を理解させ、基礎的かつ一般的な医学を学習する。具体的には、医学の定義、人体の構造や機能、診断概要や治療概要、一般臨床医学の分野及び予防医学やリハビリテーションの概要を学習し、新しい医療システムや我が国の医療保険制度並びに、保健医療の役割や活動等の概要について言及する。	
	看護学概論	看護学は人間、健康、環境、看護という4つの基本的概念から人間生活の側面を通して、人々の健康増進及び病気の予防、回復、また病気に伴う苦痛や苦悩に対して援助する学問です。看護の焦点は、このようなかかわりの過程において、対象となる人々が常に人間としての尊厳を保ち、自らの意志に沿って生活しつづけることができるように援助することを目指しています。看護は自然科学と人文科学の両方を取り入れた応用実践科学といえます。看護の考え方や、理論、医療の中での看護の役割などを学習します。健康管理士、社会福祉士、認定心理士は、看護学における人間への姿勢、人間の理解、専門職業人として持つ技術、知識において共有すべきことは多いと思います。看護学への感心を深め、将来の職業人として歩む道に役立ててください。	
	国際スポーツ健康事情	海外での短期研修において、異文化体験を通して文化や考え方、習慣の違いを実感するとともに、その社会における健康やスポーツのあり方、教育等を観察し、その国の健康への取り組みや政策、さらにスポーツの位置づけや行政のかかわり方などを学習する。当面は、アメリカを中心とした文化圏で実施、将来的には発展途上国等も視野に入れている。	
	スポーツ実技9(バレーボール)	バレーボールは、学校体育において球技の中の「ネット型」という位置づけであり、ネットを挟んでボールを打ってラリーを楽しむスポーツである。また、ラケット競技と違い、味方コート内で3回のラリーができるが、その間に仲間と協力して「ディフェンス」から「オフェンス」への変化とその戦術を楽しむことができる種目である。わが国では、さまざまな競技方法で老若男女に愛されているスポーツ種目であり、学校体育の中では、学校から高校まで取り上げられている教材である。本講義・実技では、学校体育における「バレーボール」に着目し、小学校から高校までの発達段階別の技術習得の違いを理解し、それぞれ学校段階に応じた指導法と支援の方法を学ぶ。また、指導者として基本的な技術の師範ができるように、バレーボールの基本技能の習得を目指す。	
	スポーツ実技10(ソフトボール)	投打に関する動作の基本、スローピッチとファストピッチの違い、ウィンドミル投法、ケースに応じた守備形態や攻撃法、ゲーム運営や審判法について学習する。ベースボール型スポーツの導入としてのティーボールについても学習する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
学部共通科目	スポーツ実技11(スキー)	本授業では、アウトドアという日常の学校環境を離れた場所で実施するスポーツを通して、その意義や楽しさ、安全管理などを学習していく。特に、スキーというスポーツを取り上げ、その技能の修得を目指す。スキーはこどもから老人までが生涯スポーツとして、競技的にも、また、レクリエーション的にも実施できるスポーツであり、あらゆるライフステージにおいて技能の修得を目指した教育が展開されている。本授業の受講者は、アウトドアスポーツの意義、楽しさ、安全管理に加えて、スキー技術を高め、多くのスキー愛好家に対し指導的立場を担えるようになることを目指す。あわせて、実習のマネジメントを教員とともに行うことで学校教育場面等での校外学習の実施、運営についても学習する。	
	スポーツ実技12(アクアビクス)	水中運動は、個人の健康づくりや、体力水準に合わせて実施でき、若者から中高年者、障害者の健康づくり、生活習慣病予防にまで活用できる。水の抵抗を利用し、筋力トレーニングなども全身運動でき、エネルギー消費量が大いなのでダイエットにも効果的である。	
	スポーツ実技13(ウォーキング)	誰でも手軽に実施できる有酸素運動としてのウォーキング・ジョギングを専門的実習を通して体験する。そして体力増進、体力管理に有用な健康づくりの方法を理解する。またストレッチングのスポーツ種目に応じたバリエーションを学習する。	
	スポーツ実技14(エアロビクスダンス)	エアロビクスダンスに挑戦しながら基礎知識・技術を習得する。また安全で楽しく効果のある運動プログラムを作成、指導ができるように理解を深め学習する。	
	スポーツ実技15(コンディショニング)	生活や様々な活動をしていくためには、常にコンディションの良し悪しが決め手となる。本講義は、環境の変化や、自分自身の身体のコンディショニングについて実技を通して理解し、実践できるようにすることが目的である。また、実際にコンディショニングを整えられ、健康な状態を整えられるように自動するノウハウを取得する。	
学科基礎科目	こどもスポーツ教育論	本講義は、こどもを対象としたスポーツ教育の入門として位置づける。こどもへのスポーツ教育は、乳児期まで遡れば、体育的要素よりも、からだ育て、しての要素が大きく、広く子育ての取り組みの全体を意味するとも考えられる。幼児期にいたっても同様の要素は存在するものの、近年では、より早期からの運動への取り組みが求められていることもあり、体育的要素も現れてくる。さらに、児童期では、前半において運動技能の多くの要素が習得される重要な時期であり、児童期後半ではすでに運動技能の優劣は明確になっているとの指摘すらある。本講義では、このような発育発達期を通した、からだ育て、体育、スポーツの考え方を理解する。具体的には、幼児期から小学校前期にかけては、児童の体づくりや、運動欲求、それに対する指導者の働きかけについて概観する。さらに、小学校の中期から後期の児童については、その発達段階に応じた体育の授業と体育的行事、学校や地域での運動遊びやスポーツ活動をどう指導すべきかについて、幅広い視野で基礎的な検討を行う。	
	こども健康教育論	本講義では、現代及び今後の社会において、こどもが健康で健やかな生活を営めるような社会づくりをする際に必要な対策に関しての基本的な知識の習得を目指す。その中でも健康教育という仕事がどのような経緯でできてきたのか、どのような成果を上げてきたのか、そしてどのような課題を抱えているのかということについて、適切な理解をすることが求められる。また現在こどもたちに対して、実際にどのような健康教育活動が行われているのか、そして今後はどのように改善するべきか、ということについて考える機会を提供する。	
	発育発達とスポーツ	本授業は、「こどものからだの発育発達」及び「こどものこころの発達」の2つの授業の概論的位置づけであり、からだ、こころのそれぞれに関する各論的議論は上記2つの授業内にて学習する。本授業では、暦年齢にともなうヒトの形態・機能の変化、すなわち発育・発達について概観する。特に、SCAMONの発育発達曲線やヒトの発育速度曲線に関して詳細に理解することを重要視し、以降の各論への関心の足掛かりとなる知識を身に付ける。また、受講者らの発育発達過程を振り返ることを通して、ヒトのは発育発達の多様性についても学習する。スポーツや運動に関しては、体格的な発育に関する理解とあわせて、幼児・児童期に習得が望まれる運動動作の発達過程を中心に学ぶ。	
	生涯発達心理学	生涯発達心理学は人の受精から老年期までの個人的発達について研究する学問である。その核となる仮定は、発達が青年期に完了してしまうものではなく、全生涯を通じて続く適応過程であり、そこには心理学的構造や機能の獲得、保持、変容、そして衰退が含まれているとするものである。本講義では、生涯発達の基礎となる乳幼児期・学童期に関する様々な発達の研究知見を紹介すると共に、各発達段階における重要な発達課題及び発達課題の達成に影響を及ぼす諸要因について概観する。	
	地域スポーツ論	地域におけるスポーツは、人々のスポーツ要求の高まりを背景にして、学校、自治体、NPO、クラブ、スポーツ団体といった諸アクターに支えられながら、豊かな人生の享受、こどもの健全育成、コミュニティの醸成、健康の保持増進などに寄与することを期待されつつ、展開されている。本講義では、このような地域スポーツに関する基本的事項と、現在表面化している諸問題について学習する。このことを通じて、地域スポーツの今後のあり方を考究する能力を育成する。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 基 礎 科 目	初等教育原理	本講義では、これまで経験してきた学校生活及び日常生活を振り返り、「教育とは何か」という根本的な問いかけを常にしながら生活する態度を身に付ける。こうした活動を通じて、多くの人が「当たり前」と考えている「教育」にまつわるイメージを一旦崩し、新たに教育という営みについて考え直す機会となることを目指す。 また、教育という活動の意義や目的、そして我が国の学校教育の歴史の変遷など一連の教育的な営みについて歴史的考察を加え、体系的に理解するとともに、学校における教育活動を支える指導原理と今日的教育課題との関連について理解する。	
	保育原理	保育の意義や幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、保育所保育指針における保育の基本について学び、明確な認識を深める。さらには、世界における保育の思想、歴史の変遷、我が国における保育の思想、歴史の変遷を学ぶことで、保育思想のつながりや流れについて学習し、現代の幼稚園教育や保育の基本にどのように結び付いているのかについて理解を深める。 その際に、幼児観、発達観、保育観についても授業の中で触れ、それらが、保育を行う上で、どのように影響を与えるのかについても理解する。また、現代における幼稚園教育や保育を取り巻く現状やその課題について学ぶとともに、我が国における幼保一体化の変遷や制度などについても学び、考察を深め理解する。	
	障害児の保育と教育	最近では、教育の場において障がい児と健常児と同じ「場」で保育が行われるようになった。障がい児の保育や教育といえば、何かと普通とかけ離れた特別の教育であるかのように考えられるが、むしろ一人ひとりを大切に、子どもの持ち味を十分に発揮することを願い支援する営みであると言える。障がい児の教育と保育こそ「教育の原点」として、指導とそのあり方を理解する。 障がい児保育の基礎として、障がい児保育の目的、障がい児保育の仕組み、障がいのある子どもの特徴など、その指導とそのあり方を理解する。	
	運動指導法Ⅰ (器械運動、ボール運動)	器械運動は小学校教育課程において小学校3年からの導入が決定し、また、幼児期においても多くの子ども達が体操教室などを通して器械運動に類似した運動を体験している実態がある。このような意味で器械運動の指導法に関してはより充実させる必要がある。そこで、本授業では幼児期さらには小学校第3学年から始まる器械運動単元の段階的指導過程を適切に理解・習得し、実際の指導に活かす術と技能を身に着ける。さらに、ボール運動も近年の子ども達において発達上の問題が多く指摘されている運動分野であり、器械体操同様に体育実技指導において段階的かつ効率的に指導できることが求められる。そこで、ボール運動に特化して発達段階に応じた指導法を学習する。 (オムニバス方式／15回) (30 山本 親/5回) 器械運動および体操運動に関する基礎理論とその指導法および子どもにおける発達過程を実践的に学習する。 (6 中野 貴博/5回) ゴール型のボール運動に関する基礎理論とその指導法および子どもにおける発達過程を実践的に学習する。 (49 廣 美里/5回) ネット型のボール運動に関する基礎理論とその指導法および子どもにおける発達過程を実践的に学習する。	オムニバス方式
	運動指導法Ⅱ (陸上運動、水泳)	陸上運動は低学年から高学年まで児童期を通して学習する課題である。陸上運動における走・跳・投動作は様々な距離、環境、道具を用いて実施することが求められるため、教育者も多くの技能と知識が求められる。そのため、本授業では陸上運動に関する技術向上および指導法の習得を強化する目的で実施される。水泳に関しては、近年、体育専修教員における水泳必修がなくなるなど、学校教育現場における水泳指導の不安が生じ始めている。そこで、こどものスポーツ教育指導に特化した本学科では、学生の水泳技能の向上と、指導にあたる学生の指導能力の向上を求めていく。本授業は、そのような背景の中、水泳実技およびその指導に特化した授業を展開する。 (オムニバス方式／15回) (11 四方田 健二/5回) 陸上運動(走運動)に関する基礎理論とその指導法および子どもにおける発達過程を実践的に学習する。 (14 沖村 多賀典/5回) 陸上運動(跳・投運動)に関する基礎理論とその指導法および子どもにおける発達過程を実践的に学習する。 (33 齋藤 健治/5回) 水泳に関する基礎理論とその指導法および子どもにおける発達過程を実践的に学習する。	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 基 礎 科 目		児童の体づくりと動きづくり	幼児期、児童期の子どもはその活発な日常生活行動を通して多様な動きを並列的かつ段階的に獲得していく。この時期に獲得した動きは、生涯にわたって身に付ける動き方の基礎となる。本授業では、子どもの運動発達をふまえた上で、幼児期、児童期における体づくりと動きづくり、運動遊びやスポーツなどの指導に必要な基礎的な理論と指導法を実技実習を通し習得することを目指す。特に、基本的動作スキルの発達を促すための運動方法、子どもたちが体づくりや動きづくりの学習を効果的に進めていくための教材作りや指導方法を実践を通して中心的に学習する。	
		こども運動指導論	本講義は、こどもの運動指導を適切に実践するための必須の素養となる、基礎的な知識の修得を目指す。具体的には、指導の前提となるこどもの運動発達とその測定法に関する理論的知識を学習し、その上で指導の基本的考え方、内容、配慮事項等を含めた実践的指導法について学習する。さらに、こどもの運動能力や運動指導に関する社会的環境についても学習する。 (オムニバス方式／15回) (⑥ 中野 貴博/5回) こどもの運動発達の特徴、獲得すべき運動動作および運動能力の測定法について学習する。 (⑩ 四方田 健二/5回) こどもの運動指導の方法や運動あそびの多様な活動とその意義について学習する。 (⑭ 沖村 多賀典/5回) こどもの運動能力の時代変化や運動指導における地域・学校・家庭の役割について学習する。	オムニバス方式
		こどもの表現運動	本授業は、小学校と幼児の表現運動の授業において、基本的な考え方と実践的指導力を身につけることをねらいとする。表現系とリズム系ダンス、フォークダンスを中心に、各々の特性と技法、指導法に関する理解を深め、実践を通して多様なテーマ(課題)から即興的に表現・創作する。	
		レクリエーション・ニュースポーツ	レクリエーション・スポーツともに、語源の「娯楽、楽しみ」の通り、競技スポーツとは対義的な意味であり、「楽しむ」ためのスポーツの運動構造及び技能の習得を目指す。対象としては幼児・児童期から青年前期の世代を中心とする。特に近年多くの競技が誕生している「ニュースポーツ」を種目として取り上げ、誰もが、いつでも、手軽に楽しめるために支援者がどのような支援が必要かを学習する。	
		アダプテッドスポーツ	障害のある人のスポーツは、けがや病気の回復期におけるリハビリテーションとして取り組まれたことが始まりとされるが、平成23年「スポーツ基本法」が交付され、その中で「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」と基本理念に明記されるに至った。現在は、障害者の競技スポーツとしての発展だけでなく、多くの人たちが障害の有無にかかわらず、レクリエーションや健康維持などさまざまな目的を持ちスポーツ活動を楽しみ、共に活動する社会に向けて進んでいる。これからの体育・スポーツ活動に従事する者には、老若男女、障害の有無を問わず体育・スポーツ活動の指導ができる資質が一層求められる。 そこで本講義・実技では、障害者を理解するための基礎知識を習得し、障害者に対する指導方法を学ぶ機会とする。具体的には、それぞれの障害の特性と発達との関係の理解し、各障害別の特性に応じたスポーツ活動の指導法と支援の方法を学ぶ。さらに、参加者のニーズに応じた体育・スポーツ活動を工夫する能力を高めることを目的とする。	
学 科 専 門 科 目	こどもスポーツ・健康科目	こどものからだの発育発達	本授業は、「発育発達とスポーツ」の各論として、特に、からだの発育と運動能力の発達に焦点をあてて講義する。幼児、児童の時期は一生の内でも極めて発育発達の著しい時期であり、その特徴を正しく理解しておく必要がある。いわゆる思春期スパートの問題やそれに伴う様々な機能の発達、また、それ以前に著しく発達する免疫機能など、ヒトが生活や運動をしていく上で重要となる機能的な発達についても丁寧に解説する。加えて、近年、問題視されている子ども達の運動能力や運動動作の発達過程についても解説し、どのような視点で発達の促進を働きかけていくべきかを一緒に考えていく。	
		こどものこころの発達	子どもの発達と人間関係に関わる基本的な事象について、発達心理学的な視点から講義を行う。具体的には、胎児期と呼ばれる母親の胎内において生を受けた時期から、乳児期、幼児期、児童期を経て青年期までを発達段階に沿って概観する。子どもが好きな人も苦手な人も、本講義を通して「発達」とは何を意味するのか、発達を支えるものは何かについて考えて欲しい。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 専 門 科 目	こどもスポーツ・健康科目	こどもと健康	本講義では、色々な時代背景の中で、こどもたちはどのような健康問題を抱えていたのか、そしてどのように解決されてきたのかということを理解することが求められる。その上で今日のこどもたちはどのような健康課題を持っているのかを理解し、更に将来のこどもたちが直面する可能性のある健康問題を推測する能力を育成する。加えて国際的な視点から、世界各地のこども達はどうような健康状態にあるのかを理解する。以上をまとめると、種々のこどもの健康問題を、関連性と構造化を意識しながら各論的に取り扱う講義である。	
		こどもの生活と健康行動	幼児期や児童期は体力・運動能力や運動動作を獲得する上で重要な時期であるのと同時に、基本的な生活習慣を獲得することがきわめて大切な時期である。基本的な生活習慣とは、食事や運動に加えて安全行動や衛生的な行動習慣、あるいは規範に基づく行動、規則的な生活時間の獲得など多岐に渡る。これらは、いずれもヒトが一生を健康で活動的に送っていく上の土台として小さなころから身に付けておかねばならない重要事項である。このような生活と健康行動が身についていないので将来的に社会に適応できない人間になる恐れがある。本授業ではこれらの生活習慣の重要性と子ども達における現状に加えて、健康行動獲得のための理論と促進要因について学習していく。	
		こどもの運動遊び (伝承遊びを含む)	幼児期に基本的な運動動作を獲得するために有効な運動遊び、児童期の体育や地域レクリエーションの中で重要となる運動遊びを取り上げる。この時期のこども達が積極的に運動遊びをすることでどのような変化が期待できるか、また、運動遊びを促進することで、こども達はどの程度の活動量を確保していくべきかについても学習する。また、運動遊びを通して養われる身体運動能力や人間関係、約束・ルールなどの規律を守る心、コミュニケーション能力、さらには運動成就を通して養われる自己有能感などについても科学的に実証された研究成果を提示しながら学習する。また、本授業では、様々な運動遊びを紹介しながら、こども達が模倣や創造を繰り返しながら運動を習得していく過程についても示していく。	
		こどもの食と栄養	健康で活動的な生活習慣の基本として、食生活の重要性を学習する。また、良い食生活を指導教育していくための基礎的な栄養学の知識についても学習する。さらに、こどもの発育発達と食生活との関連、食育の考え方や手段、地域社会の食育支援などについても学ぶ。加えて、現代の家庭における食生活の現状と課題について概観し、食を通した保護者への支援や、食育のための環境作り、そして特別な配慮を要する子どもの食と栄養についても学びを発展させていく。	
		こどもと地域社会	地域社会は、こどもの日常生活のほとんどを包容しており、その中でこども達は、多種多様な人々と接触し、地域文化を身に付け、社会化されていく。本講義では、このこどもの生活世界としての地域社会に着目し、こどもの発達過程において地域社会はどのような意味を持っており、どのような役割を担っているのか、さらに現在どのような問題が生じているのかを学習する。このことを通して、こどもを支える地域社会の今後のあり方を考究する能力を育成する。	
		健康フィールドワーク	今の社会や環境に生きる人々にとって、健康に活動し日常を暮らすことの意味は大きい。社会や人々との調和は欠かせない反面、健康を阻害する要因も持っている。また、子ども達の外遊びの減少は、体力や健康を奪う結果になっている。人間個々にとって健康な心身を維持するために、普段の運動やフィールド、山野や森の自然環境の中での行動や、自然との共生、調和のための知識、実践活動は重要である。本授業では、里山環境を用いたこどもの里山学校を計画、運営し、実際にこども達とともに自然のフィールドにおいて行動し、活動をする。主に野外活動や運動、山野草に関わる実習を通じて、日常での自然環境を大切に活用する知識を習得する。	講義14時間 実習16時間
		教育・体力測定評価	本授業では、主にこども達の体力測定法と教育効果の測定法について学習する。各測定を正しく実施できるようになることを第一目標とする。特に、体力の測定法については、文部科学省の新体力テストや幼児を対象とした様々な体力テスト法について、その手法を学ぶ。教育効果の測定に関しても、各種心理学的な評価尺度などについて学習していく。あわせて、実際の教育現場等でどのように測定を取り入れいか、そして、その結果をどのように活用していくかについて講義する。また、これらを活用するために必要不可欠な統計処理にも触れ、数値による解釈の重要性と方法の習得を目指す。	
		学校保健・安全論	本講義は学校保健活動の意義、歴史的経緯、実態についての基本的な知識を理解させることをねらいとしている。更に小児保健の立場から、こどもたちの健康問題に対して、幼稚園や学校においてはどのような対処をするべきかということを理解させる。加えて、現在及び将来においてこどもの心の健康問題が益々深刻化することが予見されるが、そのような状況に対しての教職員の取り組みのあり方について理解させる。特に養護教諭やスクールカウンセラー等の専門的な知識技術を有するスタッフとの連携のあり方の重要性に気づかせる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 専 門 科 目	生涯スポーツ論	我が国のスポーツの振興や発展のためには、スポーツ行政についての基礎的内容を理解しておくことが必要である。平成23年に施行されたスポーツ基本法においてはライフステージに応じたスポーツの重要性が示されている。まさに、生涯スポーツの重要性である。このような国家的施策を背景として、生涯にわたるスポーツの重要性を学習する。また、生涯スポーツを楽しむためにも、子どもの頃からスポーツや運動、レクリエーションに親しむことが効果的であり、重要であることを学ぶ。さらに、その手法、展開のしかた、地域行政等が提供するサービスやそのあり方などについても考えていく。	
	健康レクリエーション実習	こどもや中高齢者を対象とした健康増進やレクリエーション運動の指導に参加し、その中で必要な能力、知識を養う。授業では、実践のための準備手続きに加え、参加者とのコミュニケーションや配慮、実践指導への積極的参加を必須とし、その際の態度に関しては厳しく指導する。全15回中、10回以上を実践活動への参加に充当し、継続的に繰り返し参加することで、その態度や知識、技能の改善をはかっていく。	講義10時間 実習40時間
	こども家庭福祉論	子どもは保護され、教育されながら育ち、やがて大人となっていく発達途上の人間である。子ども家庭福祉(児童福祉)とは、すべての子どもが幸福感をもって毎日を生き、育ちを実現することの保障を目指す社会的営みの体系である。現代社会の、子どもの問題を中心に、子どもの権利論から子どもの権利救済や子どもを支える家族への支援などについて、現状の制度や政策にとどまらず児童虐待・非行などの実態などを通じて、児童福祉を学ぶ。	
	障害者福祉論	今日、障害者福祉は、国内的にも国際的にも著しい変化が起こっている。国際障害者年(1981年)は、わが国及び国際的にも障害者福祉の進展に大きな契機となった。さらに2006年の障害者自立支援法で障害者の福祉サービスは統一されたかに見える。しかし、まだ現実と理念との間には大きなギャップが存在し、それを埋めることに障害者福祉の課題があるといえる。障害者福祉論では、障害者福祉の歴史、理念、障害者の概念と定義、障害者に関係する法律・行政・サービス、ライフステージに沿った療育・教育・雇用などのテーマを通して、障害者福祉の現状について学ぶ。障害者福祉に関する基本的な考え方「ノーマライゼーション」「自己決定」「権利擁護」「地域生活」等をキーワードに今後の課題と展望について理解を深め、障害者福祉に関する組織や専門職及びその連携を知る。随時、具体的な事例を交えながら障害者にとつての「自立」とは何かを考えていく。	
	発達障害と特別支援教育	特別支援教育は、一人一人学び方の違った子どもたちのニーズに合わせて適切な指導方法の選択や具体的な指導内容による実践が必要となる。それによって苦手意識の克服や取り組み姿勢の改善だけでなく、上手にできないことや必要以上に注意をされることで生じるパニックや自己否定感等の二次的な問題を少しでも予防、軽減することができる。 本講義では、対応に工夫が必要となる発達障害に対する理解を深め保育・教育やスポーツの現場で具体的ななかかわりが可能となるように工夫・計画する力と共にさらにそのアイデアの実践を可能とする技術を身に付けることを目的とする。	
	こどもの医学	本授業では、こどもの運動・スポーツ指導の際に最低限身に付けておくべき医学的知識を身に着けることを目的とする。特に、近年問題が増加している熱中症や環境汚染、アレルギー対策などの問題に関しては中心的に学習する。本講義の受講生は、直接に医学的介助を行うわけではないが、発育発達期のこどもの心身の健康を保障する専門家として、小児医学の基礎的知識を持つことは不可欠であり、質の高い専門家を目指した知識提供を行う。	
	救急処置の理論と実習	救命・救急の知識は体育・スポーツ指導現場や保健医療・福祉の現場においては、非常に重要である。スポーツ指導者として現場に必要な救急法の実践能力を習得することは指導者として高い安全知識と事故防止に対する能力を身に付ける上で欠かすことができない。救命・救急に関する基礎的な知識を学ぶとともに、心肺蘇生法など応急的な実際の処置に関する技術を修得する。具体的には、一次救命処置(「心肺蘇生」「AED」「気道異物除去」と、けがや急病に対する処置(止血・包帯・固定)、傷病者の搬送、災害時の心得などを実技中心に学ぶ。	講義16時間 実習14時間
	体育科教育法(初等)	本講義は実践的な体育の内容の理解を深め実践的な指導法を習得することが目的である。具体的には幼稚園及び小学校での体育の教材研究と授業づくりができるための理論的実践的基礎を学習指導要領に基づき築くことを目指す。教科としての体育の歴史と本質並びに目的・内容・方法、体育の教材研究論、体育における学習集団の組織と学習過程の組み立てについて講義する。また、学習指導要領の体育に関する記述の変遷と現在について、体育の学習評価と教育課程づくり等々についても講義する。最終的には、学習指導案を作成し、模擬授業の実施することで、実践的指導力を身に付けることを目指す。	
	国語科教育法	国語科学習の時間は、二次的ことば期にある子どもにとって、言葉獲得が飛躍的に伸びる重要な時間である。そこで、国語科授業の理念を学び、本授業では構想段階から、計画段階までの授業の構想力・構築力を学習する。実際に授業で扱う教科書教材を使って、3領域1事項それぞれの学習指導要領の目標と内容をおさえ、代表的な教材解釈、発達段階に応じた指導の一般的方法、評価の内容方法などを学び、単元構想・授業デザインへのまとめ方を習得する。最後には自分なりに教科書単元を使って学習の指導計画案と1時間の指導案を作成する。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 専 門 科 目	算数科教育法	学習指導要領に示された、数と計算、量と測定、図形、数量関係などの内容について理解するとともに、それらを教える立場に立って把握し直し、算数科の学習指導を、教科の目標や児童観、教材観、評価観という視点をもとに、教育現場で行われている算数科教育の実践事例などにも学びつつ、算数科の年間指導計画や単位時間の学習指導案を構想し展開する仕方を習得することを目標とする。また、算数科の評価のあり方及び具体的な評価の方法についても検討する。	
	理科教育法	本講義では、学校教育法並びに学習指導要領の分析をもとに、小学校理科の目的・内容・方法について考察する。また、児童の認知発達を理解に基づいて、子どもの論理的思考や素朴理論、素朴概念などについて考える。そしてそれに基づいて、理科の学習指導について、教材の系統性や問題解決学習などの学習指導の方法について解説する。また、理科における評価の意義や目的・方法、観点別評価方法などについても解説する。 さらに、以上の学習をもとに、各学年の理科の学習指導計画を立案させ、実際にシミュレーションさせる。	
	社会科教育法	本講義では、まず、社会科では「何のために、何を、どのように教えるか」といった社会科の性格と目的・内容・方法、授業構成の原理について解説する。また、社会科の歴史、社会科教育をめぐる緒論争を振り返る。そして、社会科の教材研究の方法と授業づくりの原理、学習指導の方法、授業分析の手法、評価の観点と方法などについて、近年の研究動向や具体的な教育実践例なども紹介しながら考察する。	
	音楽科教育法	本講義では、小学校学習指導要領音楽科の目標及び内容を理解し、指導の要点を捉えることができ、音楽科の授業の構成や指導案の作成ができることを到達目標とする。そのため、音楽科教育についての基礎的な知識と概念を学び、また、学習指導に必要な演奏技術や音楽表現力を学ぶ。さらに、教材研究の方法及び指導方法を学び、それを踏まえて学習指導案を作成して模擬授業を行い、子どもの豊かな表現力育成のための指導法を実践的に習得していく。	
	図画工作科教育法	小学生になると子どもの観察力はより研ぎ澄まされていく。自分と外界との関係が明確に意識され築かれていく時期である。道具も上手に使えるようになり図画工作における表現も多彩になる。図画工作に對し得手不得手や好き嫌いが出てくるこの時期に大切なことは、教育する側が表現されたものの評価を正しく行えることである。評価基準が狭く画一的になると、その基準に合わない個性を切り捨てることになる。多様なものの見方や表現を共有し、子どもたちの個性を大切にする教育者の育成が必要となる。 本講義では、以上のような観点から、幼小の接続も視野に置きつつ、図画工作科の目的・内容及び指導法について実践的に検討していく。	
	家庭科教育法	家庭科の本質論、内容論及び小学校家庭科で育成すべき能力を踏まえて、よりよい授業を設計・実践できる能力を培う。そのために、家庭科の本質論や目標及び内容構成について理解し、それらを踏まえて実際の授業を想定した年間・単元の指導計画と評価計画の作成方法等について学ぶ。 さらに、単位時間の学習指導案を作成して模擬授業を行ない、その分析・検討・考察を通して、よりよい家庭科の授業の在り方を考究する。	
	生活科教育法	概要) 児童の身近な自然事象や社会の現象、自分自身に関わる題材をもとに、生活科の学習指導を構想し展開するために必要な知識・技能等の習得を図る。また、生活科の具体的な教育実践例や学習指導案の立案等を通して、生活科の目標や児童の発達、教材、評価について考察する。	
	初等体育	幼稚園及び小学校の体育、運動遊びの教育内容の背景にある個人的運動種目、対人的・集団的競技、運動遊びについて、について、その技術やルール、場の設定や用具の特性、指導のポイントや指導上の留意点等に関する理論と技術について、演習及び実技の形式で授業を行う。	
	初等国語(書写を含む)	小学校教員はほとんど国語科の授業を担当する。しかも教科の中で時間数が多い。その点でも国語科の学習時間は子どもにとって、言葉獲得の上で重要な時間であり、教員の責務でもあるといえる。小学校教員が理解すべき国語科教育における内容と主な学習指導について、学習指導要領解説とテキストを使って学習する。前半国語科教育のあり方を多角的に捉え、その役割と現状を知る。小学校でと取り組む国語科の指導内容について、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝国事項」について、具体的な教科書教材や言語活動を通して学ぶ。後半は小学校教員の力量として必要な基礎的な言語知識である教育漢字指導、文法、正書法(書写)等を学習する。また、教科書掲載頻度が高い作家を中心に、その生い立ちや作品群についても学習する。最後は情報化社会の中で、話題となっているメディアとの付き合い方を国語科教育の視点から取り上げ、その必要性を学ぶ。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 専 門 科 目	初等教育科目	初等算数	本講義では、初等算数科の学習指導過程に立脚させ、教科の目標や児童の認知発達などの視点を踏まえつつ、算数科の学習内容の背景となる数学各分野(数と計算、量と測定、図形、数量関係)の内容についての基本的な理解と習熟を図るとともに、ものごとを「数・量」という観点から理解する能力を養い、算数科の教材研究と授業づくりを行う基礎となる基礎的な知識と能力を身に付けるための講義を行う。 また、このことが幼児の数量や形の体験について理解することもねらいとする。	
		初等理科	本講義では、初等理科を理科の学習指導過程に立脚させ、理科教育の目標や児童の認知発達などの観点から、理科の教育内容及び教材系統について、その意義や価値を理解し、実際に教材を構成し展開する能力を養うことを目標とする。 具体的には、まず、理科の各学年、各領域の教材について、教科の目標や児童観、教材系統という観点から教材構成する視点を提示する。また、各学年、各領域の観察・実験の方法と器具を扱う技能について学習する。	
		初等社会	初等社会科に焦点をあて、教科の基本的な性格と課題、その目標・内容・方法といった教科構成の原理について理解し、その意義や価値を理解することを目標とする。また、児童の発達段階を踏まえて、学年に応じた社会科の内容構成の特色について解説する。 具体的には、中学年における「自分たちが住んでいる身近な地域」「地域の生産や販売」「飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理」「災害及び事故の防止」など、高学年における「我が国の自然や国土」「農業や水産業や工業などの生産」「我が国の歴史上の具体的事象」「政治の働き」「世界の中の日本の役割」などについて検討する。	
		初等生活	児童の身近な自然事象や社会の現象、自分自身についての事柄などについて、生活科の教科目標や児童の認知発達、教材系統の意義や価値をもとに、具体的な教材を構想し展開するために必要な知識・技能等の習得を図る。	
		初等音楽	本授業では、幼稚園や小学校の音楽科の教育において必要とされるピアノの技術の習得と、その表現力を養うことを目的とし、ピアノの集団レッスン及び個人レッスンを複数の教員により行う。童謡などを、歌を歌いながら弾けるようになることを目標とし、各個人の能力に応じた楽曲を課題として指導を行う。またその中で、音楽理論の知識や、和音による伴奏の実践、正しい発声による歌唱などを、同時に習得できるよう各受講生の状況に合わせた指導をし、豊かな表現力を養う。	
		初等図画工作	図画工作は、子どもと教師または保育者をつなぐ大切な造形活動である。そのためには教育の現場で造形政策を実践、応用ができるような技術の習得が必要である。また、技術は材料や技法、手順にかぎらず、表現に至るまでの考えをまとめる作業も必要となる。しかしながら一番大切なのは、将来教育の現場に立つ教師や保護者が制作の楽しさを実感し、その楽しさを子どもたちと共有できるような感性と想像力を身につけることにある。 本授業では、そうした観点から、初等図画工作科の教育内容を成す様々な技術や知識を身につけることを目標とする。	
		初等家庭科	初等家庭科の教育内容を構成している専門的内容について、幅広く学習する。 家庭生活や家族領域では、家族・家庭生活における現状と課題、よりよい家族・家庭生活の在り方等、食物領域では、食生活の現状と課題、栄養や食品、調理の要点等、被服領域では、衣生活の現状と課題、被服の機能や管理等、住居領域では、住生活の現状と課題、住居の成り立ちや役割、適切な住まい方等、消費・環境領域では、消費生活における現状と課題、環境に配慮した生活等について学習する。	
		教育課程の意義と編成	この授業は人間形成を促す教育課程はどのようなものかということについて探究することが主題である。教育課程の問題は、学校教育において、児童・生徒に何を教え何を学ばせるかという問題について研究することであるが、その問題はつきつめると子どものニーズと社会の要求の2つの要素をどのように統一していくかという問題になる。この授業では、そのような視点から教育課程について考えるとともに基礎的・基本的事項についての理解を深めることをめざす。	
		特別活動の理論と方法	初等教育教員としての基礎的知識・態度を養う科目として、特別活動とはどのような活動か(学習指導要領の中での位置づけ)どのような力を子どもにつけるのかについての理解を深めるとともに、特別活動を進めることのできる教師としての実践的指導力の基礎を培う。	
		道徳教育の理論と方法	道徳教育とは、主として学齢期の子供に道徳性を身に付けさせることを目標とする種々の教育の総称である。道徳性の意味については、社会的、時代的背景によりさまざまに議論されてきたが、現在では、非常に幅広い概念としてとらえられており、特定の価値観や理念に基づくものとは考えられていない。そうした観点から、学習指導要領にどのように道徳教育が位置づけられているか、道徳教育の歴史や法的な規制、家庭や地域社会とのかかわり、人権教育とのかかわりなど、道徳に関連するさまざまな話題を取り上げ、検討する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 専 門 科 目	進路指導・生徒指導論	学校教育の主要な柱である生徒指導と進路指導の実践的な理論と実践について学ぶ。これまで自身が児童・生徒として受けてきた教育の体験をもとに、新しい視点＝指導する立場に立って、原理に基づき、生徒・進路の指導にあたるための基礎知識を学習することを目的としている。 まず、生徒指導の教育的意義と課題はどのようなものであるか、どんな特色があるのか、従来の学校教育ではどのような考え方をしており、これからどうしていくべきかなどについてしっかり学ぶ。それとともに生徒の進路指導の原理と実践に関しても理解を深める。生徒の社会参加の支援・指導につながる正しい理解が、今日ほど求められている時代はない。この状況を踏まえ、生徒理解とは一体何なのか、進路指導の困難点とその解決法を深く理解してもらいたい。そしてこの学習を通して、真の指導とは生徒が「知ることを学ぶ・為すことを学ぶ・共に生きることを学ぶ・人間として生きることを学ぶ」ことを確信できるようにする。	
	教師論	本講義は教職への意欲を高めることを目的とする。具体的には、教職の意義と役割について理解すること、戦前戦後の教員の歴史について理解すること、教師の基本的・具体的資質について理解すること、現代公教育における教員の使命を理解すること、教員の職務について理解すること、教員の力量形成とその支援について理解すること、教員養成制度の概要について理解することを目指す。	
	教育心理学1	教育心理は心理学の諸理論を教育の現場に応用する科学である。学校教育を考える上で、教育心理学に関するさまざまな知識や技術を習得し、それらを利用しながら教育に関わる現象を分析的に捉えることは重要である。また、近年、「不登校」、「いじめ」、「学級崩壊」といった学校をめぐる出来事が社会問題化してきている。本授業では、教育心理学の基本的な用語や理論を正確に理解し、実際の教育現場をイメージしながら自分の中に取り入れ、学校をめぐる問題を心理学的に考える基礎を養うことを主な目的としている。主として、発達と学習の基礎的問題を取り上げる。	
	教育心理学2	本講義は、主として、「教育心理学1」の内容をふまえ、教育の方法などの具体的問題を考えながら、学習における”時”の問題(レディネス)、学習のプロセスで生じる意欲の形成と喪失の問題(モチベーション)、学習者のもつ資質の問題(パーソナリティとハンディキャップ)、教育の方法論の問題(人間関係のダイナミックス)、学習材料のもつさまざまな性質と学習者の反応の問題などについてできるだけ具体的に検討していく。	
	教育の制度と経営	教育に携わる者にとって今日の教育制度及び教育法規についての理解と認識は欠くことのできない基本的要件である。この授業では、教育制度の歴史に関する認識を深めるとともに教育実践がどのような制度制度と教育法規の中で営まれているかということについての基本的知識を獲得することを目的とする。	
	教育方法・技術論	激しく変わる教育環境の中でメディア(特にコンピュータ)利用の研究・実践と授業デザインは教育方法の中心的課題である。コミュニケーションとしての教授・学習過程の中で、教師主導の教材提示型のメディアの利用ではなく、学習者が自ら学び、思考の道具として使えることが大切である。「心理学からの新しい学びへの提案」「コミュニケーションとしての教授・学習プロセス」「学習・教授を支援するメディア」「授業デザイン」を主なテーマとして講義は構成される。	
	教育相談の基礎	本講義は、教免法における「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」に該当するものであり、教育相談について論じる。今教育界で問題になっている不登校、いじめ、非行、学校崩壊といった領域の問題を直接考えなければならない科目である。教育相談は、教育相談の意義、教育相談の基本的な技法、学校での教育相談の進め方等を学習する。特に、不登校、いじめ、非行等の子どもたちへの取り組みは、事例を挙げながら考えて行きたい。	
	小学校教育実習事前・事後指導	事前指導としては、小学校における教育実習の意義と目的、実習の内容と方法、実習日誌の書き方、記録の取り方、指導計画及び学習指導案の作成の方法等について講義する。 また、模擬授業も実施する。加えて、必要な準備物、主体的参加心得、身だしなみ(髪型・服装・言葉遣い等)校長及び教頭、指導教員等教職員、児童並びに保護者等への接し方について具体的に指導する。事後指導としては、教育実習のまとめ及び反省の生かし方などについて焦点化する。	
	教育実習1(小学校)	学校という場で行われている教育の仕事の全体を体験するとともに、指導教員の教育のもとに学級指導、教科指導、学校行事の指導等について観察学習を行う。それを基に、限られた時数、時間をかけた教材研究と学習指導案作りを踏まえて教壇実習を行う。	
	教育実習2(小学校)	「教育実習1(小学校)」の反省とその後の大学での教科及び教職に関する学習を踏まえて、学級指導、各教科の指導、学校行事の指導等に積極的に取り組むとともに、学校の組織や運営、保護者や地域住民との関わりについても幅広く体験・学習することを目指す。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 専 門 科 目	幼 児 教 育 科 目	保育内容指導法(言葉)	本授業では幼稚園における保育内容の領域「言葉」の基礎的な知識と指導法について学ぶ。授業の前半は、胎児期から幼児期までの言語発達を、その段階に沿って言葉の現象をたどり、その発達過程を概観する。続いて、乳幼児の言葉の現象とその対応のポイント、そして乳幼児の言葉の障がい、保幼小の言葉の連続性等、保育の場で起こる現代的な問題や課題へと広げる。後半は、具体的な指導法について実際に体験によって学習する。	
		保育内容指導法(環境)	学校教育法により、幼稚園教育はその目的を達成するため「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」ことを理解し、教育活動全体を考える。幼児期の特質を踏まえ、児童期の健康な生活や社会生活の営みが積極的に行われるように、小学校の理科や社会科とも関連がある自然環境を教材にして、身近な草花や小動物に関心を持ち、積極的に関わることで、情動的なこころを育て、自然が人間形成に大きな役割があることを学ぶ。	
		保育内容指導法(健康)	幼児期・児童期の各時期における子どものからだの特徴を理解し、子どもにとっての健康な生活や安全指導について学ぶ。集団保育である幼稚園、また家庭における健康管理や健康指導の重要性を理解し、子どもの基本的生活習慣の意味やそれを具体的に確立する方法を学習する。 成長途上である幼児から、児童期の健康な生活について広く学習すると共に、心身の健康の保持・増進に欠かすことのできない子どもの栄養・食育について理解を深め、健康指導を得意とする幼児教育者を育成する。	
		保育内容指導法(人間関係)	子どもは誕生したと同時に家庭という最初の社会の中で、両親、兄弟姉妹等の人間関係を通じて成長する。その後、保育所、幼稚園、小学校等の集団保育や集団教育の場で、保育者、教員や子ども達同士の人間関係を通して社会性が育てられる。 社会性が育つには、自分と他者の存在に気付き、人間関係の中での体験を通じて自立や自律して行く。その様な過程の中で、子ども達の教育に係わる幼稚園教諭、小学校教諭という教育専門職として、どのような視点で教育活動に臨み、それを実践していくことが求められるかについて考察する。	
		保育内容指導法(表現・音楽)	子どもの発達段階に応じた歌唱、遊び歌、手遊びなどの音楽表現と、楽典、ソルフェージュ、簡易伴奏など音楽の基礎技能を身に付けることを目的とする。乳幼児向けの音楽表現には、発達段階に応じたものの他、日本の風情を表す季節感のあるものや地域に伝承されてきた音楽表現が数多く存在する。子どもたちの健全な身体の発達を促し情操を高めるために、多くの音楽表現の習得を通し保育者として豊かな表現力や人間性を養うことを目指す。基礎技能では、弾き歌いや、コードの習得を含めた伴奏法、アレンジや移調の方法を身に付ける。	
		保育内容指導法(表現・造形)	保育者、教育者に必要な造形表現の基礎知識・技能を習得し、様々な活動を通して、造形表現の楽しさと喜びを体験する。空き箱など、身近な素材を使った造形表現の実技演習を行い、自分たちで考え、物を作り出す力を養うと共に、造形表現の背後にある生活や社会との関わりについて理解する。また自己表現を行う造形活動から一歩進み、自分の周りに存在する物や現実を認識し観察する感性も養えるよう指導する。 これらの実践活動を通し、造形に関する自らの評価基準を確立し、適切に指導できる技能を養う。同時に、教育指導計画を作成して実践を行える人材を育成する。	
		保育内容総論	本授業では、保育の本質を踏まえ、子どもの生きる力を育む保育の内容とは何かを学ぶ。具体的には、幼稚園及び保育所等施設における子どもの生活に対する理解、幼稚園教育要領及び保育所保育指針が示す保育内容の考え方への理解、0歳から5歳の子どもとの育ちと保育内容との関係への理解、保育内容の歴史や海外の保育内容への理解を踏まえ、乳幼児期に相応しい保育内容のあり方を学ぶ。また、保育内容を所与の固定的なものとして捉えるのではなく、子どもの生活や遊びから生み出されるという柔軟な側面があることを理解するため、特に遊びの意味について学ぶ。	
		保育課程論	本授業では、幼児教育並びに子どもに関する理解を基に、幼稚園教育における保育課程編成の意義、編成の要件そして保育課程から導き出される指導計画の種類と役割を学ぶ。その過程で、環境の構成や援助の方法を理解する。また、保育課程が計画・実践・省察・改善というサイクルを循環させることによって保育の質が向上していくことを理解する。さらに、保育所の保育課程編成の原理や幼小接続を見通した保育課程のあり方にも触れる。学生は短期の指導計画を実際に作成し、幼稚園実習に備える。	
		幼稚園実習事前・事後指導	事前指導としては、幼稚園における教育実習の意義と目的、実習の内容と方法、実習日誌の書き方、記録の取り方、指導計画及び保育指導案の作成の方法等について講義する。 また、模擬授業も実施する。加えて、必要な準備物、主体的参加心得、身だしなみ(髪型・服装・言葉遣い等)園長及び教頭、指導教員等教職員、園児並びに保護者等への接し方について具体的に指導する。事後指導としては、教育実習のまとめ及び反省の生かし方などについて焦点化する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の概要	備考
学 科 専 門 科 目	幼児教育科目	教育実習1(幼稚園)	指定幼稚園において、観察実習、参加実習を行い、幼稚園教育の実際について理解するとともに、幼児の実際の発達段階における課題やその保育内容を学び、幼稚園の役割、幼児の様子及び幼稚園教諭の職務、幼稚園教育における保育内容について理解を深める。	
		教育実習2(幼稚園)	「教育実習1(幼稚園)」の体験をもとに、さらに理解を深め、実習指導者の指導を受けながら参加実習に発展させる。幼児教育の実践をとおして幼稚園の役割について考え、できるだけ責任実習を行い、保育者の仕事や役割を理解し、保育者としての的確な判断力を養う。	
	演習科目	教職実践演習(幼・小)	「教育実習1・2(幼稚園)」及び「教育実習1・2(小学校)」で体験・学習し、またそこから反省的に学習したことを踏まえると同時に、4年次春学期までに学んだ成果に基づいて、教職に就くための資質と能力の総仕上げの学習を目指す。その際特に、「教科専門科目」「教職専門科目」「教育実習」で学んだことに架橋し、それらを総合的に活用して教科や特別活動の指導ができるために必要な実践的指導力を養うことをねらいとする。	
		専門演習	専門領域への関心を高めることを重視し、3年次以降の研究活動の基礎を構築する。そのために、専門書籍や科学論文の調べ方、読み方、輪読、さらに論理的思考の重要性についても学習する。また、科学的データのまとめ方や得られた知見の分析方法などについても、情報端末の使用技術の修得とともに学習する。	
		研究演習	こどもを対象とした、教育や運動、体育に関連する研究を遂行するための方法論と技能について学習する。1年間の通年開講とし、春学期は主に方法論の学習を全体で学び、秋学期は各指導教官のもとで研究計画及びパイロットスタディを実施することで、4年次の卒業研究のための準備をする。	
		卒業研究	学士課程における集大成として、卒業論文を完成させる。科学的視点のもとに自らが疑問に感じたり、解決すべきと感じた課題に関して真摯に向き合い、指導教官の指導のもとに一つの問題解決型の論文をまとめ、報告する。論文作成に関しては、感想文的な記述にならず、正しい科学的知見のもとに論を展開することの重要性を理解し論理的思考を身に付ける。卒業後の専門分野での社会的活動の糧になる成果を目指す。	